
ミミック・ガール

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミミック・ガール

【Nコード】

N1593X

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

森で見つけた宝箱を開けてみると――出てきたのは女の子！？
「オレは？ミミック？のシエル。以後、よろしく」
竜王の支配によって人間同士の争いがなくなった世界で、？偽装屋？の青年と精霊の少女が織りなすハイ・ファンタジー、開幕。

序幕

漆黒の闇に、黄金色の輝きが淡く浮かび上がった。

不思議な輝きは瞬く間に光度を増し、やがて獰猛な牙と爬虫類の鱗を持った大きな蛇のような生き物の形をとっていく。

「偽物が……調子に乗るなあ！」

少年の怒号とともに、金色の輝きが暗闇を斬り裂いた。風一つ吹いていなかったはずの空間に、突如として嵐が巻き起こり、激しい雷が獅子の雄叫びをあげる。

対するは、一人の女。

一陣の颶風が必殺の雷光をまとって、佇立した女に襲いかかる。絶対の死が女を捉えたかに見えた、その刹那。

「偽物はどっちだ？ 我々に——世界に、偽物の平和は必要ない」
するとどうだろう。雄牛のように猛り狂っていた風も雷も、女の掲げた緋色の手のひらの中に吸い込まれ、幻のように消えてしまっただけではないか。

「な、なにっ！」

「所詮、この程度か……つまらん。実につまらん」

大儀そうに腰から剣を抜き、女は少年に歩み寄った。

ゆっくりと、一步一步踏みしめながら——女の顔からは何の感情も読み取れない。

「……くそっ！」

身を切り裂くような恐怖に襲われ、少年はきびすを返して逃げ出した。絶望に凍り付いた背中に、女のつぶやくような言葉が突き刺さる。

「ひと思いに殺してやろう、苦しまずに済むように。その代わり——」

女の緋色に染まった腕が、闇色の間合いに光った。

「貴様の竜を、奪わせてもらう」

世界に、少年の絶叫が響き渡った。

第一幕

東からの柔らかい日差しが、眠りから目覚めた森の木々を照らしていた。早朝の爽やかな風が緑の間を駆け抜け、気持ちよさそうにさわさわと音を鳴らす。賑やかな小鳥たちのさえずりが、深緑の園に新たな一日の始まりを告げていた。

人間が立ち入ることなど滅多になく、ときおり細い獣道を目にするくらいの青々とした森の奥地。

もしこの場所に吟遊詩人が立ち寄ったならば、目の前に広がる光景を？汚れた俗世の一切から隔絶された空間？とでも表現するのだろうか。

そんな美しい自然の中を、一人の青年が歩いていた。

（ええっと、西はどっちだっけ？）

ロウ・レイNZは立ち止まると、着古したベストのポケットからコンパスを取り出し、一瞥してまたポケットに戻した。

（ベルガノの街は、南西の方角のはずだから……こっちか）

適当に当たりをつけ、ロウは再び歩き始める。

街と街、村と村をつなぐ石畳の街道から、やや離れた場所にこの森は広がっている。涼しい微風が青年の頬を撫で、可憐な花をつけた植物たちの甘美な香りがその鼻孔をくすぐった。

ロウが辺境の村を出発して、すでに小一時間ほど経つ。

しかしその間、彼は一度たりとも体を休めたり、腰を下ろしたりしてはいなかった。人の手の加えられていない深い森を、こうやってときどきコンパスで方角を確認しながら、この青年はまったく休むことなく歩き続けているのだ。

見た目には、それほど体力があるようには思えない。

外見は絵に描いたような中肉中背で、どちらかといえばひ弱そうでさえある。特に目立った特徴もなく、これといって印象に残るような容姿でもない。

強いていうなら、鼻梁に乗っかっている銀縁の眼鏡が唯一、彼が持つ外見上の個性だった。

「おっと」

ごつごつとした木の根に足を取られ、ロウはあやうく転びそうになった。体を支えようと手を伸ばし、その拍子に手に持った大きな鞆が近くの岩にぶつかる。黒々とした岩から、びっしりと生しているしている苔の一部が剥がれ落ちた。

「……つとと、危ない危ない」

ロウは大きな鞆を持ち直すと、その縁を軽く叩いて付着した苔を地面に落とした。後生大事に抱える革製の旅行鞆は、修理に修理を重ねてボロボロになっており、焦げ茶色の表面は至る所に傷がついていた。

年季の入ったそのトランクは、彼が旅路で晒された風雨がいかばかりだったのかを如実に物語っている。

（さあて、この先が問題だな。ここからの道のりをどう進んでみよう？）

再び立ち止まると、ロウはポケットから取り出した古ぼけた地図を広げて唸った。うつすらとかいた汗でずり落ちてきた眼鏡のブリッジを押し上げ、辺りを見渡す。

（もうだいたい街道からは離れてるはずだから、これ以上は森の奥へは入らない気がするんだよね。きつと、この距離を保ちつつ、街道に対して並行に進むはずだと思うんだけど……）

いつの間にか小鳥たちは放歌高吟することを止め、静まりかえった森からは風が葉を揺らす音しか聞こえてこない。

（いや、それとも万全を期して、まだ街道から離れておくのかな？ うーん、歩き通して今日中にベルガノに着こうとするか、それとももう少しだけ迂回して野宿を挟むか……それによって道筋が変わってくるんだよねあ）

しばしの間、黙考し、ロウは顔を上げた。ぼろ布のような地図をポケットに押し込み、やや右に進路を変える。

「まあ、たまには適当に歩くのもいいか」

愛用の旅行鞆をぶらぶらさせて、ロウは鼻歌交じりに闊歩していた。

(……ん?)

風の中に奇妙なおいを感じ取ったのは、そのときだった。大量の生野菜をすり鉢で丸ごとすり潰したような、独特の青臭いにおい。眉をひそめて、ロウは歩みを早める。

小高い傾斜を登った先に、においの正体があった。

「これは……」

そこにあつたのは、散乱した木片の山だった。

かろうじて外枠を残した大きな木箱が、すぐ目の前に横たわっている。編み込んだような木の根の斜面を駆け下り、ロウは木片の山のそばへと近寄った。

どうやらそれは、無残に打ち壊された荷車の残骸であるらしい。

大きさからして、一人乗りの馬車だろうか。ロウは形の崩れた荷車の周囲に、さっと目を走らせた。

血の跡はない——ひととおり検分して、ロウは安堵のため息をついた。御者と馬は、無事に逃げられたようだったからだ。

(たまにいますんだよね、こういう辺鄙な場所をわざわざ選んで行商する人が)

人気のない場所を縫うようにして街と街を行き来する商人たちの目的は、早い話が、関税逃れである。

この地方ではその土地の有力者である貴族や地主たちが、誰に断るでもなく関所を設け、人を雇っては勝手気ままに関税を取っている。自分の領地を通る行人たち相手に、通行料と称して金銭や扱っている商品の一部を要求するのだ。そういう関所は、たいていが人通りの多い街道につくられている。

大規模なキャラバンならいざ知らず、たった一人で諸国を渡り歩く行人なら、自分の利益を少しでも上げるために、人通りの多い街道は除外して、このような人気のない森や山の路程を通ることも

多い。

そして運の悪い者は、こうして全財産を失う憂き目に遭うのである。

(……『あれ』持ってたんだろなあ)

ロウは残骸の山の前にかがみ込むと、白い手袋をした手でせつせとその残骸をどかし始めた。さつきから鼻につく、青臭いにおいの正体を確かめるためである。

(こんな目に遭うんなら、初めから街道の方を通っておけばよかったろに。勇氣と無謀は違うって、きつとこういうことなんだろうね)

たった一人、孤独に旅を続けていると、どうしても心細くなる。昼間は照りつける日差しに体力を奪われ、話し相手といえど馬のみ。そして夜になれば暗闇から聞こえる異形の声、目に見えない恐怖が背筋を凍らせる。

きつとこの行商人も、そんな恐怖に怯えながら旅を続けていたのだろう。ひよっとしたらただの行商ではなく、密輸品でも運んでいたのかもしれない。そうした後ろめたさも相まって、彼らは『決して持つてはいけない物』までも所持するようになってしまふのだ。

「……やっぱり、『武器』持ってたんだ」

ロウが瓦礫の中から見つけたのは、真つ二つに折れた短いナイフだった。質素な柄は土で汚れており、鈍く光る刃の表面にはべつとりとした粘液が付着している。

(こんな程度の武器で、どうこうできる相手じゃないだろうに……これだから素人さんは困るよ)

瓦礫の中にナイフのなれの果てを投げ捨て、ロウは再び残骸を漁った。さつきからずつと鼻を突いている嫌なにおい。その根源が必ずあるはずなのだ。

荷台の底板だったのだろうひときわ大きな板を横に除けると、ようやくその正体が姿を現した。

(うわ……勿体ないなあ)

底板の下に散らばっていたのは、銀貨何枚分になるともわからないほどの薬草の束だった。それらが萌葱色の塊となって、草いきれのような何ともいえない悪臭を放っていたのだ。

たくさんの長細い葉からひとつを手に取り、ロウは顔をしかめた。

（ああああ、こんなに汚しちゃって。高いんだぞ、この手の生薬は）鮮やかな色からして、幸いにも放置されてからさほど日は経っていないようだ。ロウは薬草をひとつひとつ、じっくりと吟味しながら、まだ使えそうなものを選び分けていった。もともと薬草には長期の保存が利くものが多く、しかもにおいがきついものほど効能が高くて値も張るという。ならば、これを放っておく手はないだろう。（それに、なにも僕だけが使うわけじゃないしね）

無尽蔵にあるとも思われた萌葱色の山から慎重に選別した結果、両手でも抱えきれないほどの薬草を取り出すことができた。

にんまりと笑い、ロウは次の作業へと取りかかる。

鼻をつまみたくなるような、きついにおいを放つ薬草だ。さらに日が経って雨風に晒されれば、腐敗なり発酵なりして、より遠くからでも嗅ぎつけることができるだろう。野生の獣はこのにおいを忌み嫌っているというから、きっとこの場所を避けて通るに違いないし、仮に見つけたとしても先ほどのロウのように物色したりはしない。

（この草の価値がわかってるのは、いまのところ人間だけだからなあ）

きよろきよろと周囲の様子をうかがって、ロウは思い描いた条件に合う場所を探す。この荷物の元の持ち主や、他の人間が来ても見つからないような場所。それでいて、これを見つけてほしい人間にはすぐに見つけられるような場所。

すると、ちょうど近くに蔽つく生えている林木の根本に、小さな子どもがすっぽりと入れる程の大きさの洞を見つけた。

（よし、いい感じいい感じ）

ロウはその樹の根に歩み寄ると、抱えていた薬草を綺麗そうな岩

陰にひとまず置いて、持っていた旅行鞆を開いた。苦楽をともししてきた大きな旅行鞆の中は、最小限の衣類や洗面具などの生活雑貨が窮屈そうに詰まっていた。

鞆の中から、まずは小さな麻袋を取り出し、それから味気なく折りたたまれたシャツの隙間に手を入れて角張った鞆の分厚い底板を持ち上げる。二重底の下から出てきたのは、小さな板きれと簡素な金具一式だった。ロウは手のひらに乗るくらいの大きさの板きれを数枚、引っ張り出すと、白い手袋をした手のまま器用に組み立て始めた。

四角形に組み上がった板を小さな金具で固定し、全体のバランスを確認。均整がとれていることを確かめてから、今度は底板を取り付けてさらに枠を強固なものにしていく。次いで、蝶番になっている金具を手際よく取り付け、さらに板を組み込んでいった。

（これでよし、と）

ロウは満足そうにうなずいた。完成したのは、蓋のついた小さな箱だった。

いや、ただの箱ではない——それは、冒険小説の挿絵にでも描かれていそうな、赤みがかった？宝箱？だった。

早速、ロウは片手に乗るくらいの大きさの宝箱に、先ほど選り分けた薬草を詰め込みにかかった。見た目以上に容量はあるらしく、宝箱は次々に薬草を飲み込んでいく。

箱の中身がいっぱいになったところで、ロウは薬草を詰め込むのを止め、残りは麻袋の中に放り込んだ。蓋を閉め、また別の金具で蓋全体を固定して、作業は終了である。

樹の洞の中に宝箱を丁寧に置き、ロウはふうとため息をついた。（あとはこいつを『落し子』の誰かが見つけてくれるまで待つただだね）

旅行鞆の二重底を元に戻し、薬草の残りを入れた麻袋を縛ると、伸びをしながら立ち上がった。

？落し子？と呼ばれる旅人たち——彼らに見つけてもらわなければ、

この宝箱も意味をなさない。

彼らの旅は困難を極め、行く先々で災難に見舞われるのが日常。旅の途中で命を落とすことも、まったく珍しいことではない。そんな彼らの助けに少しでもなれば——その一心で、ロウたち『シェイプシフター偽装屋』はこうやって各地に宝箱を設置しているのだ。

今回は拾った薬草を詰めたが、もちろん普段は自前の道具や薬品、あるいは食料などを入れる。数分ほどすれば、宝箱の染料が赤銅色から周囲の環境に近い色に変色し、景色に溶け込んで普通の人間には容易に見えなくなる。

だが、その染料から発せられる微弱な『息吹』の力を感じ取り、落し子たちは目に頼ることなく、ロウたち偽装屋が用意した宝箱を見つけることができるのだ。そうやって、彼らは過酷な旅路の一助を得るのである。

（本当は、落し子が堂々と街道を歩けるようになればいいんだけど……ん？）

ふと、ロウはカチツ、カチツという奇妙な音を背後に聞きつけた。硬い殻をぶつけ合わせて鳴らしたような、連続的な音。ロウはこの種の音を仲間との意思疎通に使っている存在を、たったひとつだけ知っていた。

（勘弁してよ……）

恐る恐る、背後を振り返る。

薬草を運んでいた馬車を襲い、鋼鉄のナイフを真つ二つにへし折った犯人。

？武器を持つ者？だけを狙って狩りをするという、変わった習性を持つ異形の生命体。

「り、徒影……」
リザード

思わず、ロウの口からその単語がこぼれ出た。

ロウの背後に、この世で最も獰猛な生き物が佇立していた。

まるで影が実態を持ったかのような漆黒の甲殻。鋼鉄よりもなお硬いその甲殻に身を包み、左右に裂けた口からは獰猛な牙が生え、

屈強な手足には長く鋭い爪が獲物を切り刻みたがっている。姿形は蟻螂を連想させるが、しかしその体の大きさはまるで灰色熊だ。

宝箱を設置するのに気をとられて、この異形の生命体が近づいてくるのにいままで気がつかなかったのだ。

（ま、待て待て！ 焦るな、大丈夫さ。こいつらは腹を空かしていない限りは、武装した人間しか食べないじゃないか。ほら、僕はいま何の武器も持つちやいない。こいつが僕を襲うはずがな——）

唐突に甲殻の徒影が、数十羽の烏の集まりよりも大きい、耳障りな鳴き声で吠えた。

ロウの額から冷や汗が吹き出る。

（前言撤回！ こいつは腹を空かせてる。僕を食べるつもりだ！！）
こうなつてはもう仕方がない——逃げるが勝ちだ。

ロウが足下の旅行鞆に手を伸ばしたのと、徒影が目の前で巨腕を振り上げたのがほぼ同時。

間髪入れず豪速で落下してくる漆黒の斧を、頭上に掲げた旅行鞆の腹が受け止める。

「くっ……」

細い体のどこにそんな力を隠しているのか、ロウは徒影が放った必殺の一撃を受け止める。だが、完全には受けきれていない。

「偽装屋の七つ道具をなめんなよ！」

押し負けたかに見えた刹那、ロウは慣性を使って、旅行鞆の取っ手をひねった。

武器には見えないものが、武器でない保証などない——特に、それが偽装屋愛用の所有物ならば。

取っ手の動きに連動して、底板の一部が勢いよくスライドし、徒影めがけて霧状の液体が噴射した。強烈な刺激臭のする毒液を両目にもろに浴び、徒影が上体を仰け反らせる。

（よし、いまだ！）

もう片方の前肢を蹴りつけ、斧の影から脱出。右手ひとつで旅行鞆を半回転、噴霧の仕掛けを元に戻す。と同時に、空いた左手で、

地面に置いたままだった麻袋を拾い、遠心力に任せて投げ上げた。
（たかが徒影一匹にやられるようじゃ、偽装屋失格だつての！）

目をつぶされて怒り狂う徒影から一足飛びで距離をとり、投げ上げた布袋に狙いをつける。旅行鞆の角から垂れている紐をつまみ、定めた狙いのちょうど真逆に引つ張る。鞆の側面から筒がせり出し、バネ仕掛けの矢が三本、立て続けに放たれた。

徒影の強固な甲殻を貫くにはあまりに短い矢は、しかし、安物の薄い麻布を正確に射貫いて、内部で炸裂。深緑の薬草が四散する。鉄色の雨を浴びて、徒影は猛り狂った。

「へっ、ざまあみる！」

辺りに立ちこめる強烈な悪臭——いくら徒影といえど、もう人間の臭いなど嗅ぎ分けることなどできないだろう。これで徒影は、一時的にはあるものの、視覚と嗅覚の両方を失ったことになる。

駆け出したロウを、かろうじて残った聴覚に頼って追跡しようとするが、いきなりそんな器用な真似ができるはずがない。こうなれば、もうロウの独壇場だ。

（独壇場っていつても、後はただ逃げ回るだけなんだけど……）

自嘲気味に笑って、ロウは前に向き直り——

——直後、横っ腹に強烈な一撃をくらった。

「ぐあっつあ、かはっ……」

肺から空気がすべて押し出され、胃液が逆流してくる。

（な、につ……！？）

気を失うぎりぎりのところで、かろうじて意識を保ち、ロウはのたうち回りながらも非必死に顔を上げる。偽装屋の青年を見下ろすようにして、山羊ほどの大きさの影。

ロウは己の油断を呪った——徒影は、二匹いたのだ。

先ほどの徒影が大型の灰色熊ならば、こっちはその子どもといったところだろう。色が薄い紺色であるところを見ると、まだ成長しきっていない幼体らしい。

にもかかわらず、この膂力。たった一撃で全身を駆け巡った痛み

は、激痛なんて表現ではまるで足りない。それでもロウが気絶しなかったのは、死への恐怖と、それ以上に偽装屋としての矜持があったからだろうか。苦痛に歪む顔で、ロウは幼い徒影をにらみつけた。「ぼ……くは……こんな、ところで……」

絞り出す声も、徒影が甲殻をぶつけて鳴らすカチカチとした音にかき消されてしまう。なんとかして立ち上がるも、踏み出す足がふらつく。倒れないようにするので精一杯だ。

か弱い人間を、幼い徒影はまるで玩具で遊んでいるかのように追尾する。人外の表情は、ロウには読み取れなかったが、きっとその顔は獲物を捕らえた喜びに笑っているに違いない。

（どうする、ロウ？ 何か策を考えろ。どんな困難も靴ひとつで乗り越えてきた、一人前の偽装屋だろ、お前は！）

ロウが徒影に襲われたのは、これまでに一度や二度のことではない。だが、ロウはその度に、この異形の生命体から逃げ出してきたのだ。

その経験が——というより、意地と根性が——ロウの足を生き残る方角へと向ける。

森の中を駆けるロウの後方で、徒影の幼体はまだカチカチと音を鳴らしている。おそらく、獲物を仕留めたことを親に報告しているのだらう。どんな動物も、子どもの頃は親に褒めてもらいたいものだ。

（親子水入らずの食卓に並ぶのは、ごめんだぜ……！）

重たい旅行鞆を気力で握りしめ、ロウは後ろを振り返った。

「徒影の腹の中に入るくらいなら……一か八か賭けてみるさ」

最後の力を振り絞って、跳躍。

（きつと、こいつ驚いた顔してるんだらうな）

ロウの跳んだ方向に、着地すべき足場はない。

大地に刻まれた裂け目——森の奥地に口を開く溪谷へと、その身を投げ出し——ロウは直下の濁流に飲み込まれていった。

第二幕

「う、うーん……」

仄暗い谷底で、ロウはゆっくりと目を開けた。ぐっしりと濡れた衣服が、ロウの全身から問答無用に体温を奪っていく。どうやら仰向けに寝ているらしい。急流に流されるうちに眼鏡をなくしてしまったようで、ロウはぼやけた視界で明るい方を見た。

はるか上方に、青い空が広がっている。ロウが目を細めると、綿をちぎって浮かべたような白い雲が、緩やかに青空の海を泳いでいるのが見えた。

（どれくらいの間、気絶していたんだろう……）

徒影に追い詰められて、谷底への決死の飛び込みをした。重力に引つ張られてどんどん落ちていき、水面に叩きつけられたところまでは覚えている。馬車に轢かれたような衝撃が全身を襲い、堪えられなくなって気を失ってしまったのだ。それを考えると、いまこうして生きているだけでも奇跡的といえるだろう。

「いつ、痛たた……」

上体を起こすと、側頭部に鈍い痛みが走った。手で押さえ、髪の毛生え際を探る。幸いにも、血は出ていないようだ。頭にとどまらず、体のあちこちから悲鳴が上がったが、とりあえず大きな怪我はしていない。

大きく深呼吸して呼吸を整えると、ロウはふらつきながら立ち上がった。

（どこまで流されたんだろうなあ……つと、さすが仕事道具は死んでも放さなかったか。ま、死んでないけど）

無意識のうちに自分の左手が握りしめていた旅行鞆を見やって、ロウは一人微笑んだ。ロウの左手は、主の意思とは無関係に、古びた旅行鞆の取っ手をつかんだまま硬直している。指を一本一本解いていき、ようやくまた言うことを聞くようになった。

そんな頑固な左手の先には、小川が静かに流れていた。切り立った二つの崖に挟まれて流れる澄んだ川は、ロウを飲み込んだものと同じものとは思えないほど穏やかな表情を見せていた。

（上から見たときはすごい速く流れてたのに。この様子だと、だいぶ流されちゃったみたいだなあ）

足下の砂利を踏みつけて、ロウは湿った岩壁に近寄る。

（よし、この壁を登れ……るわけ、ないか）

谷底の水の流れは、主には前日に降った雨の量によって決まるといふ。ここ数日は雨が降っていなかったから水位も低い、時期が時期ならロウの背丈よりも高くまで水が流れ、頑強な岩壁さえもその流れで削り取ってしまうのだろう。ロウが見つめる消炭色の岩々は、どれも角が取れていて、手足を掛けて登れるところなどないに等しかった。

ロウはポケットから地図を出して——水を含んだ地図が使い物にならなくなっていることに気づき——それをぽいと投げ捨てて記憶の紐をたぐった。

（たしかこの川は南東に向かって流れた後、西に折れてそのままベルガノがある方向に流れていたはずだから……）

山奥から流れるこの川の水は、ベルガノの街の貴重な水源になっていたはずだ。地図上では、水門を通って街の中に入り、そこからはいくつかの用水路に分かれて、また街の外で一つの流れに戻っていたはず。そこを通っているとすれば、さすがに誰かに気づかれて、今頃は街の診療所にも担ぎ込まれているに違いない。

（つてことは、あの街よりも下流に流されてるってことはないよな。とすると、このまま川の流れに沿って行けば、街までたどり着けるんじゃないか？）

ともかく、こうやって立ち止まったまま考えるより、実際に歩いて確かめてみるのがよい——ややあって、ロウの頭はそう結論づけた。思考よりも行動に重きを置くところが、各地を巡る旅に暮らす偽装屋らしい性格だ。

空を見上げれば、岩の天井を切り裂いたような頭上の景色を、一羽の鳥が飛んでいた。ロウは愛用の大きな旅行鞆から予備の眼鏡を取り出して掛けると、緩やかに流れる小川の下流へと足を向けた。しばらく歩みを進めたところで、ロウは違和感を感じてふと立ち止まった。岩壁に群生するツタ植物の中に、不審な輝きを見つけたのだ。

（なんだ？ この光……？）

それはほんのわずかな光だった。並の人間ならば気づかずに通り過ぎてしまうであろうわずかな違和感を察知できたのは、偽装屋としての観察力の鋭さからだろうか。

奥にわずかな光が差すツタ植物は、びっしりと岩壁に張り付いている。ロウは好奇心も手伝って、それらの植物を引きはがしてみることにした。白い手袋をした両手が、力任せにツタを引っ張ると、木賊色の植物は意外にも素直に剥がれ落ち、その奥からぽっかりと空いた穴が姿を現した。

（やけに大きな洞窟だな。ん……向こう側に行けるみたいだ）

見ると、洞窟の奥に薄明かりが差していた。光の正体はどうやら洞窟の向こう側の出口を照らしている日の光のようだ。

ここで、ふつうの人間ならば気味悪がるところなのだろうが、ロウは偽装屋である。

ベリベリと音を立てて、入り口を塞ぐ邪魔なツタをすべて引き剥がすと、ロウはうつすらと明かりの見える洞窟の奥へと進んでいった。本来ならば、日が暮れる前にベルガノに着いておきたいところなのだが、こういう人目につかない場所を調べるのも偽装屋の大切な役目である。

（面白そうだなあ。冒険の香りってやつ？ いったい何があるんだろう）

……無論、膨れあがった好奇心がはち切れんばかりだったことは言うまでもないのだが。

五十歩と行かぬうちに、じめじめとした洞窟は終わりを告げた。

代わりにロウを迎えたのは、世にも奇妙な景色だった。

「これは……すごいな……」

思わず、ロウの口からため息がこぼれ出た。洞窟の先に広がっていたのは、想像を絶する光景だった。

山を垂直にくり抜いたような、そんな巨大な穴の中。そこにあったのは、見たことも聞いたこともない、古めかしい遺跡だった。小さな村ならすっぽりと収まってしまいそうなほどの穴の内部に、石造りの怪しげな建造物が立ち並んでいるのだ。

ロウがいるのは、空に向けて口を開く巨大な穴の中腹辺りだ。穴の底からはいくつも石の塔が立っており、塔と塔は石橋で結ばれていた。石橋はロウが立っている場所からも伸びており、まるで突然の来訪者を歓迎しているかのようにさえ見える。

（こんな穴の話を、旅の吟遊詩人から聞いたことがあるぞ。天坑っていったっけな？ なんのいたずらか、自然はときどきこういう巨大な穴をつくり出すんだって……）

昔の記憶をたぐり寄せながら、ロウは恐る恐る、石橋の上に足を乗せた。穴は自然のいたずらだとしても、石の橋や石の塔は、どう見たところで人の手による物である。

（昔はここに村でもあったのかな？）

だとすれば、無人になったのはよほど昔のことなのだろう。藍鼠の石橋はあちこちに草木が生い茂り、半ば自然と一体化している。にもかかわらず、靴の底からはびくりとも動かない石の固い感触が伝わってきて、ロウの心を落ち着かせた。これを造った人々は、とても優れた石工技術を持っていたようだ。

橋の中腹辺りまで来て、ロウはふと頭上に目をやった。仰ぎ見た先には、澄み渡った青空が、巨大な穴の円周によって真ん丸に切り取られていた。ため息が出るほどの美しい円である。

なんという大自然の摩訶不思議だろう。一度はそう感心したものの、ロウの頭はすぐさまその考えを否定した。

（違う……自然にできたものが、こんなにきれいな円をしているは

ずがない。あそこの岩肌なんて、まるで鉋で削ったみたいじゃないか）

疑問はすぐに確信へと変わった。自然にできた大穴の中に、人間が塔を建てたのではない——巨大な縦穴も強固な塔や石橋も、すべて人間がつくり出したのだ。

（あるいは、人間ではない誰か……かもしれないな）

ロウは、かつて小耳に挟んだ古の伝承を思い出した。

その昔、人類最後の愚行と呼ばれた幻獣戦争よりも以前、この世界には数多くの精霊が棲んでいたという。彼らは、矮小な人間たちとは比較にならないほどに強大な『息吹』を有し、高い知能と理性を持って独自の生活を営んでいた。

ときに賢者の顔をして人間に力を与え、ときに人間を惑わしては面白がり——今となってはわずかな文献や、吟遊詩人たちの歌にのみ姿を残す彼らだが、もしかしたらここはそんな精霊たちが暮らしていた場所なのかもしれない。

（こりゃあ、とんでもない場所を見つけちゃったな……）

驚き半分、嬉しさ半分で、ロウは巨大な穴の中心へと進んだ。

（けっこう息吹が強い……もしかしたら、落し子もこういう場所に立ち寄るのかな）

手袋で隠した左手の甲に、焼けるような痛みが走る。

間違いない——ここには魔力を発生させている『何か』がある。

遺跡の中心に立つ塔は、一際高くそびえており、その頂点には祭壇のような儀式めいた台座が据えられていた。

そして、その祭壇の上には——

「これは……宝箱？」

ロウの視線の先に、偽装屋にとってはあまりに見慣れた直方体が横たわっていた。大きさこそ彼らが扱う物より一回りほど大きかったが、形状はとてもよく似ている。周囲の石に溶け込むようにして鉛色に変色している箱は、偽装屋が落し子たちのために各地に設置する宝箱に、驚くほど類似していた。

だが、偽装屋の使う宝箱に、大きさ違いの品はない。とすればこの場合、形状が似すぎていることが問題だった。

（偽物、か……僕の目は誤魔化せないよ）

偽物の宝箱は、落とし子に悪意を持っている輩が、よく使う手である。偽装屋が落とし子を支援するために設置する宝箱にそっくりな箱を偽造して、中に毒や罠を仕掛けるのだ。駆け出しの落とし子などはよくこの手に引っかけた。故に、そういった偽物を排除するのも偽装屋の大切な役目のひとつだった。

（つと、鍵がかかっているな）

宝箱のふたを開けようとしたが、ぴくりとも動かない。ロウは慌てず、懷に手を入れると、ポケットから細長い針金を二本、取り出した。

特殊な形状の先端を持つその二本の針金を宝箱の鍵穴に差し入れ、慣れた手つきで鍵穴の内部を引っ掻く。宝箱によく使われている錠前は、中にある爪を上手いこと横にずらせば解錠できるものが多い。ピッキングは、偽装屋としての当然の技術だ。

（楽勝、楽勝——）

だが次の瞬間、ロウの耳に、獣のうめき声のようなものが聞こえた。

（なんだ？ 徒影か！？）

はっと後ろを振り返る——が、そこには誰もいない。辺りを見渡しても、荘厳な遺跡が無言のまま広がっているだけだった。石の建造物が声を発するわけもない。

（気のせい……か）

気を取り直して、ロウは再び解錠作業に取りかかった。

細い針金は力を込める向きを間違えると、簡単に折れてしまう。鍵穴の中で折れてしまつては面倒だ。慎重に、二本の針金を鍵穴の奥へ奥へと差し込んでいく。それらを交差させ、小さな穴の中の感触を確かめるように手首を捻り——

「う、ううう……」

今度は、よりはつきりと、先ほどのうめき声が聞こえた。

（何なんだ、いったい！？）

すぐさま後ろを振り返るが、やはり誰もいない。ロウの脳裏を漆黒の影がよぎる。

（もしかして、また徒影か？）

徒影は大陸の生き物の中でも指折りの強さを誇っているため、奴らには何かに擬態したり、物陰に隠れたりする本能がない。つまり、注意さえ払っていれば、その接近を肉眼で察知することが可能だ。姿が見えないということは、いまはまだ直視できる距離にはいないということだ。だとすれば、こんなところでぐずぐずしては行かない。一刻も早くこの宝箱を開けて、中身を廃棄しなければ。一日に二度も徒影に襲われるのがごめんである。

（また逃げきれるとは限らないからな。急がないと……）

ロウは手にした針金を、ぐいと穴の中へと押し込んだ。そのとき

「あつ、あんつ……」

宝箱が、喘いだ。

（なっ……？）

予想だにしない出来事に、ロウは戸惑いを隠せず、後ずさる。すると宝箱は、ロウの手に握られた針金を、ぐいと引っ張ってきた。

「な、なんだ！？」

ロウは手にした針金を鍵穴に持って行かれないように、懸命に引っ張り返す。

「ああ……ううん……あつ……」

そして宝箱はまた低い声で喘ぎ、ぐくもった声を発しながらうねうねと動き始めた。

周囲の石の色に溶け込んでいた表面が波打ち、次第に明度を上げていく。まるで急速に成長する植物を見ているかのような、そんなあり得ない動きで、宝箱はみるみるうちに膨張した。

啞然とするロウの前で、小さな宝箱だったはずの『それ』は、い

まやすっかり姿形を変えていた。

「ふぁーあ……よく寝たあ」

そこに現れたのは、ピッキング道具を口にくわえた、一人の女の子だった。

日の光を受けて輝く金色の髪が流れる小川のように長く肩にかかり、白磁の肌は艶やかな張りがある。純白な薄い絹の服はとても簡素なつくりだが、彼女が身につけるとなぜか高貴な雰囲気を感じてきた。長い睫毛、小さな桜色の唇——男に生まれたならば誰でも見とれてしまう美貌は、しかし、決して媚びたような印象を与えるものではない。衣装で着飾った町娘や、化粧で塗りたくった娼婦などでは絶対に真似できない優雅さを身にまとい、祭壇の上に立つ少女は大きな伸びをした。

「んー、はあっ」

ぱちりとまぶたを開け、青金石を思わせる紺碧の瞳がくるりと動いた。欠伸ひとつとつても、優雅さを欠かない少女である。

その美貌に、しばしの間惚けていたロウは、はっと我に返った。

（ち、ちよつと待った！ 宝箱が女の子に变身するなんて、聞いたことがないぞ。あり得ないだろ！？）

そんな芸当は、たとえ落し子が『息吹』を使っただとしても、不可能なはずだ。

可憐で儚げな美少女に対して、明らかな恐怖と戸惑いの眼差しを向け、ロウは少女に詰問する。

「い、いまの、どうやったんだ！？ きみはいったい何者だ！」

すると、たおやかで儚げな美貌の少女は、触れれば消えてしまいそうな印象のまま——しかし、まったく可愛げのない声で言い放った。

「……は？ おっさん、誰？」

まだ二十歳を過ぎて間もないロウを？おっさん？呼ばわりした少女は、不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、口に咥えていた針金をふつと吐き出すと、ぼりぼりと頭を掻いた。

「ってか、なんであたし起こされたの？ マジわかんねんすけど」
ひ弱そうな外見とは裏腹に、やたらとドスのきいたハスキーボイスである。なんとも、第一印象からの落差が激しい少女だ。

（中身のない宝箱を開けたときみたいだな。外面に期待を煽られて、いざ開けてみれば中身は……と、そんなこと考えてる場合じゃない！）

ロウは頭を振って、少女に詰め寄る。

「さっきのは『息吹』なのか？ だとすると、きみは落し子なのか？」

『息吹』というのは、落し子だけが操ることができる、いわば魔法のようなものだ。本当はどんな生き物の体にも宿った力なのだというが、落し子のそれは特別な力を持っているのだという。自分の姿形を変えられる息吹など、ロウは聞いたことがなかったが、一応、念のために確認したのだ。

「何言ってるの、てめえ。マジで意味わかんねえ」

「いいから、ちょっと手を見せてくれ！」

この少女が落し子ならば、その証が必ずあるはずだ。ロウは問答無用に少女の左手を引っ張った。

「うわっ、なにすんだよ、おい！」

少女の抗議を無視して、左手の甲を確認する。が、細い五指をもつ少女の手の甲では、きめの細かい柔肌が陽の光を受けて輝くばかりで、シミひとつない。

（落し子なら、左手の甲に『竜の痣』があるはずだ。ということは、この子はやはり落し子じゃないのか……）

「気安く触るんじゃないよ、この下衆人間がっ！」

少女は汚い言葉でロウを罵りながら、電光石火の勢いで手を引っ込めた。まるで汚物にでも触ったかのように、ロウに触られたところを服で何度も拭う。

「落し子じゃないなら……きみはいったい何者なんだ……？」

ロウはひとり頭を抱えた。もし、この少女が落し子なら、ロウは

偽装屋として支援しなくてはならない。だが、少女には落し子ならば必ずあるはずのもの——左手の甲に黄金色に浮かぶ竜の紋章——『竜の痣』がない。よって、落し子ではない。

しかし、この少女は落し子ではないにもかかわらず、たったいま目の前で宝箱から人間へと姿形を変容させてみせたのだ。

（もしもこの子が、落し子の敵となり得るのなら、ここに放置しておくわけにはいかないぞ……）

静かにかがみ込むと、ロウは旅行鞆に手を掛けた。

武装する者を執拗に狙う徒影に襲われないようにするため、偽装屋は普段、武器になるようなものは極力身につけないようにしている。だが、あらゆる状況に臨機応変に対応するため、この鞆のように仕込み武器を隠した道具を携帯するのが常だ。実際、ロウは徒影に襲われたとき、鞆に仕込んだ毒液や短矢の活躍によって、なんとか逃げ出すことができている。

（女の子を傷つけるのは主義に反するけど、この際、多少乱暴になつてしまうのは仕方ない、か……）

偽装屋が最優先しなくてはならないのは、いつだって落し子の支援だ。怪しげな術を使う者なら、いつ何時、落し子を襲うかわからない。それに、彼女にその意思がなくても、不思議な力を持っているというだけで？ 奴ら？ に利用されてしまうかもしれないのだ。

孤独な旅を続ける落し子たちを自分の不徳に巻き込むわけにはいかない——ロウは少女の隙を伺うようにして顔を上げた。

「もう一度だけ聞くぞ。きみは何者だ？　そして、さっきの妖術はいったい何なんだ？」

すると、祭壇に立つ少女は偉そうに腕組みをして、意外にも素直に名乗りを上げた。

「オレは『ミミック』のシエル。以後、よろしく」

女の子が一人称に『オレ』を使うのもどうかと思ったが、それ以上にはロウの気を引いたのは別の単語だった。

「ミミック……？」

その言葉に、ロウは手にした鞆を危うく取り落としそうになった。
「なんだ、知らねえのか？ てつきり、オレたちって有名なんだと思ってたんだけど」

つまらなさそうにシエルと名乗った少女は顔をしかめる。対して、ロウはどう言葉を返したらいいものか、反応に窮していた。

「いや、知らないわけじゃないんだけど……」

（知らないわけじゃない。たしかにこの子がミミックなら、すべて説明がつく——でも、それはあり得ないだろ）

『ミミック』——それははるか昔に存在した精霊の種族だ。

あらゆるものに擬態する能力を持ち、一度触れたものになら完璧に姿形を変えてみせる。そうやって人前に現れて、人間たちを驚かせては喜ぶといういたずら好きの精霊。この少女が本当にミミックなのだとすれば、宝箱に化けていたのにも納得がいく。

しかし、それはあり得ないのだ。なぜなら。

「精霊たちは皆、三百年前の幻獣戦争のときに、一匹残らず絶滅したはずじゃないのか？ それにはもちろんミミックも含まれている。きみがミミックなわけが——」

「あ、やっぱみんな死んじゃったんだな」

本当に彼女がミミックであるならば、同胞の死を意味するはずのロウの言葉を、少女は何の感慨もなく受け止めた。

「いやあ、人間どもがあんなばかでつかい戦争おっぱじめたら、そりゃ精霊だってバタバタ死んでくわなあ。しかも最後の辺り、オレらと契約がどうのこうのって、狩りみたいなことしてたし。ま、仕方ねえな」

「……きみ、仲間が死んでるのに悲しくないの？」

「うーん、別に。そんな仲いい奴もいなかったしな。見ず知らずの精霊がくたばるよりも、親しくしてた人間が死ぬ方がよっぽど——」

そこまで言って、少女は何かを思い出したように口をつぐんだ。その美しい顔に陰りの色が差したかに見えたが、それも束の間、すぐにまた闊達な表情に変わる。

「で、オレってさつき得意の『擬態』を披露したはずなんだけど。それでも信じてねえわけ？ オレがミミックってこと。目の前で何よりの証拠を見といてさ」

「う……たしかに、まあそうだけど」

「だろ？ だろ？」

ロウが困ったような顔をするのを見て、シエルの方はどんどん明るい表情になっていく。まるで、自分はいたずら好きの精霊だと言わんばかりだ。

「んでよ、これからどうすんのさ。お前、ミハエルに言われて来たんだろ？」

「……誰って？」

人名なのだろう。男性の名前としては古くからある一般的な名前だ。とはいえ、ロウの知人にはいない名である。

「あれっ、違うの？」

シエルは肩すかしを食らったように、きよんとする。

「ま、まあたしかに、誰かを迎えに超越すだなんて言ってなかったけどさあ。でも、ふつう女を一人で待たせるんだったら、それくらいの気遣いはするよなあ……」

ぶつぶつとつぶやきながら、シエルは頭上を仰ぎ見る。綿をちぎったような雲はすでにどこかに流れ去り、蒼穹がロウたち二人を見下ろしていた。

「げっ、『竜^{エッグ}孵島』もなくなってるし！ ……参ったな、こりゃ」

「参ったなって……きみ、竜^{エッグ}孵島を知ってるの？」

いたって自然に発せられた重要語句に、ロウはすぐさま食いついた。

「ん、ああ知ってるも何も……いや、なんでそれをお前に話さないといけないんだよ。お前、ミハエルの使いじゃないんだろ？ 関係ねーじゃんか」

すねたように口をとがらせ、シエルはそっぽを向いた。

「関係ないなんて、そんなことは……そうなんだけど。と、とにかく

く！ きみは竜髯島とどういつながりがあるんだ！？」

ロウは心の中で齒がみしながら、叫ぶように言った。少女が口にしたのは、落し子たちが目指す最終地点——無限の天空のどこかを漂う、嵐をまとった浮島の名前だ。もしこの少女が竜髯島の関係者なら、ロウには彼女の手助けをする義務がある。

落し子たちは皆、竜髯島を目指して旅をする。偽装屋が影ながら落し子たちを支援するのも、すべては彼らが無事に竜髯島にたどり着くことを願うてのことだ。

（絶滅したはずの精霊で、その上、竜髯島のことを知っているだっ
て？ この子、いったい何者なんだ！）

ロウは迷った——自分が偽装屋であることを、この少女に明かしてもよいものかどうか、と。

ロウが躊躇するには、理由がある。偽装屋も、落し子同様、敵の多い存在だからだ。

（もしこの子が『奴ら』の手先なら、うかつに偽装屋であることを明かすわけにはいかない。この子の正体に確信が持てるまで、こっ
ちの正体は隠しておかないと……）

そんなことを考えていると、シエルがまた大きく伸びをした。

「ふぁーあ……まあ、あれだ。住んでたんだよ、竜髯島には。ミハ
エルと一緒にな」

「す、住んでた！？」

これはまた、とんでもないことを平然と言う。開いた口を閉じる
ことも忘れて、ロウが啞然としていると、シエルは、

「うーん、せつかく目が覚めたことだし、また眠るのもなんだな。

……よし、ここはいいちょ、ミミックとしての本分を果たすとすっ
かな」

「ミミックの本分……？」

「おうよ。まあ、見てなつて……ほら、あれ」

シエルは形の良い胸を張ると、すらりとした手でロウの背後を指
さした。しなやかな指の動きにつられて、ロウは背後を振り返る。

後ろを振り返るのはこれで三度目だ。

そして、三度目もやはり、ロウの背後には何もなかった。

「いったい、何があるっていうんだよ……」

何を指さしていたのか確認しようとシエルの方に視線を戻し、ロウは目を見開いた。

祭壇の上からシエルが消え失せていたのだ。まるで煙になって消えてしまったように、影も形もなくなっている。祭壇の後ろに隠れているのかと思って、慌てて覗き込んだが、そこにもやはり少女の姿はない。

（まさか、そんな簡単に人が消えるわけが——）

だが、何度辺りを見渡してみても、人っ子一人いなかった。そこにはただ、ロウを囲むようにしてそびえる崖と無機質な遺跡、そして無音の静寂が広がるだけだった。

「幻でも見てたのか、僕は……」

ぼそりと、ロウはつぶやいた。

徒影に襲われ、濁流に飛び込み、得体の知れない太古の遺跡に迷い込んで、自分は頭がおかしくなってしまったのだろうか。

（ミミックか……幻覚だったと思った方が、よっぽど納得いくよな）
ふうと大きなため息をひとつついて、ロウは旅行鞆を手に立ち上がった。いなくなってしまったものはしょうがない。たとえそれが幻覚であつたにしろ、なかったにしろ、ここにずっといるわけにはいかないのだ。

（今日中にベルガノに着かないと、野宿決定だもんな。まあ慣れるからいいけど）

すでに傾き始めた日の光を背に浴びて、ロウは元来た道へと歩き出した。

第三幕

産業都市ベルガノは、市民によつて選出された議員が治める、自治都市である。

かつて、辺境にこの街を興した数人の富豪と百余りの職人たち。彼らが寄り合いの場として使つていたとされる建物を改築して、ベルガノ議事堂は建設された。

もともとは富豪の一人が街で最初に建てた私邸であり、そのため内装は議事堂とは思えぬほどに豪華だ。十人以上の人間をゆうに収めることのできる大きな部屋がいくつもあり、年に何回か行われる総議會を除いて、議員たちによる話し合いはもっぱらそちらで行われている。

そんな部屋の中のひとつ。夕焼け色に染まつた西空の見える窓を横目に、部屋の壁に交差するように飾られているのは、ベルガノ議事堂と『蛟竜騎士団』の紋章がそれぞれ描かれた二つの旗だ。交差する二つの旗は、巨大な産業都市を支える行政機関の象徴であり、ここがベルガノ自治議會の話し合いの場であることを表している。

いま、中央に長細い四角形の大きな机を陣取らせたその一室で、高齢の議員たちが顔をそろえていた。机の両脇に整然と並べられた所定の椅子に腰を下ろし、老人たちは皆一様に押し黙っていた。

重い空気が支配する中、最初に口を開いたのは、長机の端、壁の交差する旗に最も近い位置に座る一人の老人だった。

「——會議を始める前に、例の劇場について私から質問がある」

老人は、會議の末席に目を移した。そこには窓から差し込む夕陽の光がなくとも緋色に染まつた赤毛の目立つ、一人の若い女が座っていた。

「アリシアどの……本当にあの劇場は必要なのかね？」

一堂に会した議員たちの口から、ため息がこぼれる。議員たちの空気を読んでか読まずか、すぐさま指名された女が立ち上がった。

女性とは思えぬ長身が、老人たちのつくりだす厳粛な空気に臆することなく言葉を紡ぐ。

「恐れながら、議長……何を今更、と申し上げたいところですね」
やや古めかしく、小馬鹿にしたような言い回しだが、彼女の言葉には議員たちの大半がうなずいた。それは嘆息する議員たちの心境を代弁するものだったのだ。

アリシア・ル・ファレル——女性にして、蛟竜騎士団ベルガノ支部、その支部長を務める歴戦の騎士は、さらに言葉をつなげた。

「開演を明日に控えて、まだそのような……あの劇場の必要性については、すでにさんざん話し合われたではありませんか。ここに至って、いったい何が不服であると申されるのか？」

議長と呼ばれた老人は、首肯しながらも、どこか納得できないように唸る。

「たしかに、必要性に関しては何の問題もない。より大きく、より裕福になるために発展してきたこの街に、ああいった娯楽施設は必要だ。そこに依存はない。だが」

老人のしわがれた手が、白いあご髭の前でゆっくりと組まれる。

「どうも、近頃の君たちは過激な活動が多い。ついこの間も、近くの村で偽装屋の青年を火あぶりにしたというではないか。少しばかり、やり過ぎではないのかね？」

火あぶりという尋常でない単語に、議員たちの間にも動揺が走る。彼らを見やって、アリシアは呆れたように眉をひそめた。

「お言葉ですが……我ら『蛟竜騎士団』の使命は、『竜王』と落し子をこの世から抹殺すること。やつらを支援する偽装屋を処刑するのは、至極当然でございます」

「それはわかっている。もちろん、わかってはいる」

「では、何が問題だと？ 何の問題もないではありませんか」

「何の問題もない、か……本当にそう思っておられるのか、蛟竜騎士団の騎士は」

最後の方は消え入るようになつばやきになっていた。が、ため息を

ひとつつくと、議長の老人は意を決したようにアリシアを見やった。
「簡単な話だ。君たちのやっていることは……そう、平たく言えば、ただの『人殺し』なのだよ、アリシアどの」

部屋に緊張が走る。何人かの議員は頭痛を起こしたように頭を押さえた。構わず、老人は続ける。

「君たちにとつてはあまり触れてほしくない問題ではあるだろうが、ベルガノ議会は特定の思想で動く機関であつてはならない。議会が資金を援助しているのは、なにも君たちの思想に賛同しているからではないのだよ。そこを忘れないでくれたまえ」

「……わかつております」

アリシアは苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「ご心配には及びません。『あれ』は、ただの劇場です。それ以上も、それ以下でもございません。必ずや、議会の皆様ならびに市民の皆様のご期待に添えるような結果をご覧に入れましょう」

蛟竜騎士団の騎士はそれだけ言つと、椅子に腰を戻した。もうこれ以上の議論は必要ないと、言葉にせずとも行為が物語っていた。議長の方もこれ以上の追求はしないで、街の予算についてなど別の議題へと話を移した。

だから、誰も気づかない。

「平和ぼけした豚どもが……」

机の下で拳を握りしめるアリシアの口から、押し殺した小さなつぶやきがこぼれていた。

第四幕

産業都市ベルガノ——その諱が付いたのは、この街が工業で発展した街だからだ。

大陸の南部にあつて、中央の都市から見れば十分辺境と呼べる土地でありながら、ベルガノの街では人の往来が絶えることがない。無論、ここ一帯で最も大きな街であるため、それだけ物流も盛んだというのも、街が活気で溢れる一助になっている。

街の周囲には農作地帯が広がり、この季節は農夫たちが額に汗を浮かべながら麦を刈る姿を見ることが出来る。彼らは朝日が昇る前から働き始め、夕日が沈んだ後もなお作業を続けるが、それでも自前の農地から採れる農作物だけでは街全体の需要を賄うことができないほど、ベルガノの街で暮らす人間の数は多い。

そのため、街の住人たちは他の街の食料から行商人が運んできた食料を買い取ること、街の食料不足を解消している。彼らとの取引に使われるのは、もっぱらベルガノの特産品である貴金属や織物だ。

そのため、街の中は鍛冶屋や金細工屋、織物屋などが所狭しと軒を連ねている。賑やかな街にはそれだけで様々な物が集まるので、各地で採れた農作物、優秀な人材、潤沢な資金も風の噂も、南部で生まれたものならば、一度はすべてベルガノに集うとさえいわれる。その言葉は多少大げさだとしても、たしかにこの辺境の地においてはあながち嘘ではないのかもしれない。

当然、街が大きくなればその分、徒影に襲われる危険性も増す。徒影は本能的に武器を持つ者のみを襲うが、生きるためには狩りをするからだ。狩りの対象に人間が選ばれることも珍しくはない。

だが、ベルガノの徒影対策は万全だ。さすが、工業で発展した都市らしく街の周囲に高い壁をぐるりと建設し、強固な守りで異形の生物の侵入を防いでいるのだ。よほどの大群がやってこない限りは、

その壁ひとつで守備は十分である。そしてさらに、この豊かな街が徒影の襲撃に遭わない理由が、もうひとつあった。

それは蛟竜騎士団と呼ばれる、大陸でも数少ない戦闘集団の存在である。ベルガノの政治を司る自治議会の正式な承認によって、蛟竜騎士団はその支部を堂々と街の中央に構えているのだ。昼夜を問わず、大勢の騎士が街を徒影の脅威から守っている。

『蛟竜騎士団』——世界広しといえども、これほどまでに組織だつて武装した戦闘集団もいないだろう。徒影が武器を持つ者を襲う以上、自ら好んで武器を持つ酔狂な輩はいない。だが、蛟竜騎士団だけは、ある目的のために銀白の鎧兜を身にまとい、必要とあらば鋼鉄の鋭利な剣を振るうのである。

その目的とは、落し子と偽装屋をこの世から抹殺することである。（奴らがいなけりゃ、僕たち偽装屋の仕事も、ちよつとは楽になるんだろうけど）

そんなことをぼやきながら、ロウは閉門ぎりぎりの時間に、ベルガノの壁門をくぐった。奇妙な古代遺跡からずっと歩き通しで、谷底ではびしょびしょになるまで濡れた服も、いつの間にか乾いていた。

肉体はまさに疲労困憊の極地にあるが、しかし今夜の宿をすぐに探さなくてはならない。すでに辺りは暗くなりかけており、家々に明かりが灯り始めていた。

（街の入り口で蛟竜騎士団の検問がなかったのはよかったけど、まだ油断ならないからなあ……）

ベルガノの街中に足を踏み入れてからというもの、ロウの顔は険しい。蛟竜騎士団が駐屯する街において、偽装屋はただ宿を探すだけでも命がけなのである。

徒影の出現によって法治国家の概念がなくなりつつあるこの世界において、蛟竜騎士団のような統一された武装集団がはつきりと敵に回るというのは、驚異以外の何ものでもない。ロウはこれまでの旅で、幾度もその恐ろしさを経験していた。

（火あぶりにされかけたりとか、数十人に追い回されたりとか……
笑えないよ、まったく）

ため息をつき、ロウは重い足で夕闇の街を歩く。下手な宿に泊まると、偽装屋であることがばれたとき、蛟竜騎士団に密告されかねないのだ。そんな危険は冒せない。

（たしか、ベルガノには偽装屋のギルドがあつたような気がするんだけどな……そこなら安全なんだけど）

ギルドというのは、偽装屋に報酬を支払う組合のことである。

徒影の脅威から守ってくれるため、蛟竜騎士団は広く民衆に受け入れられているが、それでも全員が彼らを歓迎しているわけではない。地方の貴族や富豪にもそれはいえることで、蛟竜騎士団に不満を持つ有力者を出資者にして、シェイプシフター・ギルドは個人で活動する偽装屋に宝箱の補給や金銭を供給しているのだ。

ロウは宿屋を目にする度、店の前に掲げられた看板を注意深く観察した。

偽装屋を受け入れている店の看板には、仲間内にしかわからない小さな目印がついているものだ。一軒一軒、ゆっくり時間を掛けて確認し、三件目にしてようやく、ロウは目当ての看板を掲げる宿屋を発見した。

二階建ての宿屋の一階はちょっとした酒場も兼ねているらしく、扉を押し開けて中に入ると夜の喧噪と酒精の香りが押し寄せてきた。「いらっしやい。酒かい？ それとも泊まりかね？」

気前の良さそうな亭主が、カウンターのの中から声をかけてきた。

「両方頼むよ。でもまあ酒は後でいいや。部屋は空いてるかい？」

「ちょうど一部屋空いてるよ。階段を上がって、右手の二つ目の部屋だ。宿代は半分が前払い。残りは出て行くときに頼むよ」

ロウは亭主から提示された金額をカウンターの上に置いて鍵を受け取ると、粗っぽい作りの階段を上がった。

（右手の二つ目だよ……これか）

これまた粗っぽい作りのドアを開け、質素というよりも貧乏くさ

い部屋へと足を踏み入れる。中には粗末なベッドがひとつ。それに傾きかけている机がひとつ。安い宿代に見合った、実に殺風景な内装だった。

（まあ贅沢する必要もないしな……）

ロウはベッドにどっかりと腰を下ろした。途端に、これまでの疲れがどつと押し寄せてきた。あやうく睡魔に意識を持って行かれそうになる。

（……っと、まだ眠るわけにはいかないだった）

ロウは旅行鞆を引き寄せると、縁についた汚れを丁寧に手で払い落とした。これからも長く付き合っていく鞆だ。大事にしなければならぬ。

汚れた服も着替えようかと鞆の留め金に手を掛け、だがやはりやめておいた。

（これしきのことδειいちいち着替えてたら、服が何枚あつても足りないもんな）

徒影に襲われようが、谷底に飛び込もうが、大したことないと言いつけるだけの度胸。それが偽装屋としての自分の強みである——というのが、ロウの持論だった。

（さて、宿も確保したし、ギルドの場所でも探っておこうかな）

ロウは腰を上げると、持ち歩くのが癖になってしまっている旅行鞆を片手に、一階へと下りた。先ほどの気さくな亭主に適当な酒を注文し、少しだけ声を落として尋ねる。

「ところで、ちょっと聞きたいことがあるんだけど——」

極力、さりげなさを装ったその質問は、途中で亭主の声に遮られた。

「うちの地下は会員制のバーになっててね。悪いけど、見せるものを見せてくれないと入れないよ」

亭主は唐突にそう言って、いたずらっぽく笑い、あごで店の角を指し示した。角張ったあごの先には、やけにしっかりと造りの扉がある。

「ま、お客さんが『そういうの』じゃなかったら、ここで飲んでいきな」

「……いや、僕は『そういうの』だから、地下のバーとやらで飲むことにするよ」

冷静なふりをしてロウは返したが、内心では舌を巻いていた。

（さすが、でかい街に偽装屋用の宿を構えてるだけのことはあるなあ）

亭主はロウの質問を先取りしたのだ——この街のシェイプシフター・ギルドはどこか、という質問を。まさか宿屋の地下にあるとは思っていなかった。

「よくわかったね。やっぱり、経験つてやつ？」

「まあな。この街じゃ、あんまり手袋してるやつは見ねえからな。それが旅行鞆ひとつで泊まりに来たってえと、まあおよそ目的はひとつしかねえだろ」

屈託のない表情で、亭主はげらげらと笑った。つられて笑いながら、ロウは渡された酒を一息で飲み干し、言われた扉へと向かった。やけに重い鉄扉を開けると、階段が地下へと伸びていた。

（毎度のことと思うけど、どこのギルドもほとんど変わらないつくりなんだなあ）

そんな感想を抱きながら、階段を下る。下りた先に、鋼鉄製の頑丈な扉が控えていた。扉のちょうど目の高さくらいの位置に、のぞき穴のような切れ目があった。

ロウがその前に立つと、のぞき穴の向こう側から声がした。

「『しるし』は？」

ロウは無言で右手の手袋を外すと、それを裏返して扉の方に向けた。いつもはめている手袋の裏側には、落し子の『竜の痣』を模して描かれた偽装屋の証——支援者の紋章がある。

偽装屋になるには厳密な審査が必要だから、この刺青は同時に、偽装屋であることの何よりの身分証明でもあった。ロウが偽装屋の紋章を見せると、ややあつて鋼鉄の扉から門が外される音がした。

「さあどうぞ——ようこそ、ベルガノへ」

扉の中から出てきたのは、長い黒髪を腰まで垂らした妖艶な女性だった。

「わたしはクリス・ウォルトン。ひさしぶりの偽装屋さんだから、なんだか嬉しいわ。よろしくね」

「ロウ・レイNZです。滞在中、お世話になります」

握手を交わし、ロウは扉の内側へ招き入れられた。

中に入ると、地下室だというのにずいぶん明るいことに驚かされた。天井から吊された変わった形のランプが、隅々まで部屋を照らしているからだった。しっかりと空気の流れも計算されているようで、淀んだ感じはない。さすがは産業都市である。

部屋の壁に目を移すと、客に出すのであろう多種多様な酒が置かれた棚があり、その前にはカウンターがあった。部屋の真ん中には数卓の小さなテーブルが置かれているので、なにもカウンター席だけが酒を嗜む場所というわけではないらしい。テーブルの回りではすでに十人余りの男女が、ワイングラスを片手に談笑していた。椅子は置かれていないので、テーブルに置かれた鮮やかな料理は立っただけでつまんで食べている。

「おっ、兄ちゃん。新しいお客さんかい？」

「ゆっくりしてけよ。ここの店はうまい酒出すから」

ロウに気づいた何人かが声を掛けてきた。皆、すでに出来上がっているらしい。

（これ、全員が偽装屋なのかな……？）

ロウはにこやかに応じつつも、内心は疑り深く彼らを観察した。偽装屋はばらばらに各地を旅しているのが常なため、十人以上が一堂に会するなど滅多にない。もしこの中に、蛟竜騎士団の密偵でも紛れ込んでいたら話は別だが。

そんなロウの不安を感じ取ったのか、クリスが振り向く。

「安心して、彼らはこの街で暮らすギルドの出資者たちよ。お酒がおいしいからって、毎晩、ここに来てくれるの。お陰でわたしも寂

しくないわ」

「あ、そうなの？　そういえば、この街のギルドは会員制のバーの形を取ってるって、上で言ってたっけ」

「そうなのよ。みんな馴染みのお客さんだから、ここを蛟竜騎士団に売ったりはしないわ。今のところ、本職の偽装屋さんはあなただけね」

「僕だけ？　他に偽装屋は来てないの？」

「そうね、ちよつと事情があつて……たぶん、みんな敬遠してるんだと思うの」

思わせぶりに手招きして、クリスはカウンターの中へと入っていく。ロウは旅行鞆を適当な床に置くと、彼女の前の席へと腰を下ろした。

「こんな大きな街だから、昔はもつとたくさんの落し子や偽装屋が行き来してたんだけど……あなた、この街が議会に治められてるのは知ってるわよね？」

「市民から選挙で選ばれた議員たちが、話し合いで政治を行ってるんだよね？」

ベルガノの街の政治制度は、民意を反映しているとかで、他の街の評判もいい。

（それが、何か問題なんだろうか？）

ロウは首を捻った。クリスがさらに説明を続ける。

「その議会が、公に蛟竜騎士団を迎え入れちゃったものだから、ここ数年の間で、この辺りで騎士に捕まる落し子や偽装屋が増えるのよ。たいていはいわれもない罪なんだけど、蛟竜騎士団が無理矢理連れて行って処刑しちゃうの」

クリスは申し訳なさそうにうなだれた。漆黒の瞳には深い憂いの色が浮かんでいる。本来なら、そういった弾圧から落し子や偽装屋を守るのも、ギルドの役目だからだ。

「蛟竜騎士団の支部長が替わってから、急に摘発が多くなって……噂では、裏で誰かが糸を引いてて、この街で『とんでもないもの』

をつくつてゐるって話なんだけど。あなた、知らない？」

聞かれて、ロウは苦笑する。肩をすくめて、首を横に振った。

「知ってたら、ここに立ち寄ったりしないよ。僕たちは逃げるのが得意だから」

自嘲めいた笑いに、クリスも同調して微笑みを返す。目を細める彼女から母性的な魅力が溢れ出ている。ロウの顔が思わずにやける。さておき、偽装屋がない疑問は氷解した。なるほど、どうやら偽装屋たちの多くはベルガノに着く前に、街道を行く行商人や農夫たちから蛟竜騎士団の噂を聞いて、迂回路を取っているらしい。

（僕は仕事しながら来たから、そういうの耳に入れられなかったもんなあ）

もし知っていたらこの街を避けて旅程を組んだらどうか、とは考えずにおいた。クリスのような美人と二人きりで話すことができたのだから、よしとしようではないか。

「でも、あなたが来てくれて嬉しいわ。偽装屋の来ないギルドなんて……わたし、やっていく自信をなくしかけてたところだから」

垢抜けた笑顔で嬉しそうにクリスは語る。この笑顔を見られただけでも、この街に立ち寄った価値があったというものだ。

思わず綻んでしまう顔を引き締め、ロウは軽く咳払いをした。仕事のできる男、というものをアピールしておいた方がいいだろう。

「じゃ、そろそろお仕事の話をお願いするよ。早く酒も飲みたいし」「そうね。ちょっと待ってて」

うなずくと、クリスは一度カウンターの奥へと姿を消し、再び現れたときには分厚い帳簿と地図を抱えていた。

「じゃ、まずは今回の集計ね。新しく設置した宝箱の数はいくつ？」「全部で四つだね。中身は、食料が二つに、武器と薬草が一つずつだよ」

言いながら、ロウは手渡された地図に、自分が宝箱を置いた場所を書き込んでいった。小さな宝箱に入れられる中身はだいたい限られており、食料、小型の武器、医療品、金品くらいしかない。よっ

て、それぞれに応じた数種類の印のつけ方が決まっている。

偽装屋がギルドからもらえる収入は、良くも悪くもすべて歩合制だ。落し子が旅の途中で拾った宝箱をこういった街のギルドで申請し、それを置いた偽装屋にギルドが金銭を支払う仕組みである。出資者だって仕事をしない者に投資はしたくないだろうから、当然といえば当然の制度である。

ロウが地図に印を書き込む間に、クリスは帳簿をめくって、落し子に拾われたロウの宝箱の数を確認した。使用された宝箱の情報は、馬車や伝書鳩によってギルド同士で完全に共有されているのだ。

「あら、あなた、優秀じゃない。前回から数えて、六つも拾われているわよ。いい仕事してるわね」

クリスはそう言うと、硬貨を数えて小さな袋につめた。

「はい、これ。前回分の報酬よ」

「ありがとう。助かるよ。そろそろ旅費が底をつきかけていたところなんだ」

ロウは金を受け取って微笑んだ。これでまた、偽装屋としてギルドからの評価が上がったことになる。

報酬に歩合制を採用しているということは、偽装屋へのギルドの評価は必然的に仕事の出来で決まってくる。優秀な偽装屋というのはつまり、落し子にできるだけの宝箱を拾わせることができる者のことだ。そして、ギルドから優秀であると認められれば、旅先での待遇がそれに伴ってよくなるのは自然の成り行きだった。

その証拠に、ロウを見るクリスの視線が、先ほどと比べてやや熱を帯びたものへと変わっている。

（これも役得ってやつかもしれないな）

艶めかしい濡れ羽色の髪の乙女。選り好みができるほど女性に好かれる質ではないので、ふだんは好みについて考えることなどないのだが、改めて熟考すると、ロウはクリスのような女性が好みだった。

差し出されたワイングラスを傾けながら、ロウとクリスは世間話

に花を咲かせた。仕事の時間は終わり、これから個人的な交友を楽しむ時間である。趣味や休日の過ごし方、好きな本などについてひととおり話し終え、月並みな話題も尽きたところで、ロウはふと昼間のことを思い出した。

「そういえば、今日、変な奴を見かけたんだ」

「ん？ 変な奴って？」

ロウが投げた餌に、クリスが興味津々といった様子で食いついてきた。こういうやりとりはいつぶりになるだろう。言葉と言葉の間さえ楽しみながら、ロウは肩をすくめてみせた。

「ああ、自分のことをミミックだって言う女の子に会ったんだ」

すると一瞬、クリスはきょんとして——そしてすぐに、けらけらと笑い出した。上品さをまったく崩さないところは、さすが客商売をしているだけある。だが腹を抱えて笑うその目には、透き通った小粒の涙まで浮かべていた。

「おいおい、そんなに笑うことないだろ？」

「ごめんなさい。でも、急におかしなこと言い出すから……」

目尻をぬぐいながら、それでもクリスはくつくつと笑いを堪えるのに必死だ。

「ミミックだなんて……それはまた、とんでもない珍獣と出会っちゃったわね」

「出会っちゃったわねって、きみ信じてないだろ？」

「そりゃそうよ。森の精霊なんて、おとぎ話の中でしか聞いたことないもの」

彼女の言うように、この三百年の間、精霊を見かけたという話はない。

（精霊の噂すら立たないもんな。信じないのも無理ないか——僕だって、あれが本当にミミックだったのか、まだ自信がないわけだし）
昼間見たあの少女は、いったい何者だったのか。やはり自分が幻覚を見たにすぎなかったのだろうか。ロウはグラスに注がれたワインを一気にあおった。

「おとぎ話、か……」

ロウがつぶやくと、ようやく呼吸を整えたクリスが、

「それとも、なあに？ 夢のある話で、わたしを口説いてるの？」

そう言つて、いたずらっぽい笑みを見せる。

「さあてね。偽装屋は簡単に気を許さないからなあ」

「ふふ……懸命なこと」

ロウはワイングラスをカウンターに置いて、椅子から立ち上がった。その女と明日も会えるときは、話が盛り上がったところで余韻を残しつつ去るのが上策——いつぞやか、旅先の酒場で遊び人から聞いた話だ。

「じゃあ、今日はこの辺にしておくよ。ごちそうさま」

「あら、もう休んじゃうの？ 残念」

「一応、長旅で疲れた身だしね。また明日も来ていいかい？」

案の定、クリスは満面の笑みでうなずいた。

「ええ、もちろん。楽しみに待ってるわ。それじゃ、今夜はしっかり疲れを癒してね。これ、わたしからのおごりよ」

クリスはカウンターの下から、小さく折りたたまれた紙を取り出した。

「寝る前に飲んでみて——精力つくから」

「おつ、気が利くね。ありがとう」

くすくすつと微笑むクリスと視線を交わし、ロウは薬包を受け取った。

「お前つて、下心丸出しだなあ。これだから人間は」

「まあそう言うなつて。健全な男子なんだよ、僕は……えっ？」

無視しかけたのをとどまって、ロウは慌てて声のした方を振り向く。

（なつ……！？）

さつきまで誰もいなかった隣の席に、見覚えのある金髪の子が座っていた。

「へっへっへー、潜入成功つてか？」

少女は口ウの手から薬包を取り上げると、オブラートごと口の中にぽいと入れた。

「むしゃむしゃ……うん、なかなかいい薬だねえ。たしかに精力つくわ、こりゃ。オレの下半身が元気になったって仕方ないんだけどさ。ははっ」

「ごくん、と飲み下し、少女はのんきにあくびをする。

「きみ、昼間の！」

と、その刹那、上品な笑い声であふれていた店内は騒然となった。

「し、侵入者よ！」

カウンターの中で、クリスが悲鳴にも似た声を上げたのだ。他の客たちの視線が一瞬にして少女に集まり、たちまち店の中は殺気で満ちた。

「き、貴様っ、いったいどこから入ってきた！」

「蛟竜騎士団の密偵か！？」

談笑していた客たちが、ワインボトルを片手に、一斉に少女を取り囲む。

「お、おいおいっ、ちょっと待った！　とりあえず落ち着こうぜ！」

少女は——つい数時間前に出会ったばかりの、見た目だけならいたいけな女の子は——両手を頭の上にあげて慌てふためく。

「そんな殺気立たなくてもいいだろ？　な？　そうだ、話し合おう。話せばわかる！　ほら、お前からも何か言ってやってくれよ」

なれなれしく、そして悲痛な眼差しを口ウへと向けてくるが、そんなこと知ったことではない。

「なんできみがここにいるんだ！　どうやって忍び込んだ？」

「ははっ、よくぞ聞いてくれました。実はね……と、その前に」

かわいらしい見た目と裏腹な言葉遣いの少女は、困ったような顔をして、

「お願いだから、この人たちをなんとかしてえ……」

大勢に囲まれて、ぶるぶると震えながら涙目で訴えてくる『自称ミミック』の少女に、口ウは大きなため息をついた。

第五幕

「だからさあ、悪かったって。何度も謝ってるじゃんか」

後ろからついてくるふてくされた声を、ロウは完全に無視して歩き続けた。

「なあなあ、無視すんなって。オレ、何百年も誰ともしやべってなくて、これでもけっこう寂しかったんだぜ？」

二人がいるのはベルガノの街の外、満月の照らす川沿いである。穏やかな水流が二人の傍らを前方から背後に向かって流れている。二人の進む方向の地面がやや小高くなっているのは、流れをさかのぼっているからだ。清く澄んだ水面は、ランプが必要ないほどに輝く黄金色の満月をくつきりと映して揺らめいていた。

（くそ、なんで僕がこんな目に遭わなきゃならないんだ……）

川辺の砂利を蹴飛ばして、ロウは毒づく。というのも、夜になって閉まった壁門の代わりの抜け道をわざわざクリスから聞いてまで、若き偽装屋は今日やって来たばかりの道を逆戻りしているからだ。

声にこそ出さなかったが、小刻みに震える双肩から怒りのほどが読み取れる。

それもこれも、頭のネジが何本か抜け落ちている、おめでたい精霊のせいであった。

「ロウさん、もしもーし。ほら、考えようによっちゃあ、こんな美少女と深夜のデートじゃん？ かえって運が良かったってもんじや……」

「ああもう、さっきからうるさいんだよ！ 誰も好きこのんで連れてきたわけじゃないんだ！ 黙れ、もしくは力尽くても黙らせるぞ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたロウが、鬼の形相で背後のシエルに詰め寄った。頭ふたつ分は低い彼女を鬼の形相で見下ろして、怒声をあげる。

「きみ、自分がどれだけ僕に迷惑かけてるか、わかってるの？」

「あはは……ごめんなさい」

しゅん、とうなだれて、ミミックの少女はうつむいた。いかにもしおらしい彼女の様子に、ロウは大きな嘆息を吐き捨ててきびすを返す。ここで怒鳴っていても仕方がない。再び歩き始めた青年の後ろを、精霊の少女はまるでコバンザメか何かのようにぴったりと張り付いてくる。

ロウの脳裏に、にらみをきかせたクリスの顔が蘇ってくる。

『へえ、あなたこの子の知り合いなの……知り合いなら当然、面倒見てくれるわよね？』

宿屋の地下で密かに営んでいたシェイプシフター・ギルド。厳重な鉄扉に守られた秘密の酒場に開業以来、初めて侵入した少女はその後、ロウとともにこつてりと事情聴取された。摩訶不思議な能力を見せることで、彼女が精霊の生き残りであることは信じてもらえたものの、その処遇は拷問にも似た質問攻めからようやく解放されたロウに一任されることになったのだ。

（せっかくクリスといい雰囲気だったのに。手の込んだいたずらしやがって、このミミックは……どうせ絶滅するなら、最後の一匹までしっかり死んどけよな！）

出会ってから半日も経っていないのはシエルもクリスも同じはずだが、どちらが魅力的かは言うに及ばず。外見はたしかに女性の印象その他諸々を決定づけるが、そんなもの所詮は偽物の美しさで、最終的に大切なのは内面を含めた本物の美貌である。なにが美少女とデートだ。まったく嬉しくない。

「よりによって、一番なくしたら困るものに化けやがって……なんでもまた、僕のトランクなんか化けたりしたんだよ！」

「いやあ、一番手頃だったもんでさ……つい」

あははは、と間の抜けた笑いでシエルは誤魔化そうとする。あるうことかこのミミック少女は、ロウの旅の装備がすべて詰まった大切な商売道具になりすまして、ギルドへと忍び込んだのだった。本

物はもちろん、例の遺跡に放置したままである。

「そんな大事だったのか、あの鞆？」

「お前には関係ない！」

毒づいて、ロウは足を速めた。大事ななんてものじゃない。あの鞆は旅から旅へのロウにとつて、唯一、自分の縁とできる宝物だった。（なんて情けないんだ。いままで肌身離さず持ち歩いてきたのに、すり替えられたことに気づかなかったなんて……）

しかし、いまとなつてはもう後の祭りである。

「なんなんだよ、きみのそのけつたいな能力は？ 精霊つてのはみんな、そういうのは迷惑な力があるのか？」

罵声にも似た問いかけに、やっと自分に興味を持ってもらえたシエルが、待ってましたと言わんばかりの明るい声で答える。

「おつ、よくぞ聞いてくれました。あれはな、『擬態』っていつて、精霊の中でもオレたちミミックだけが使える特別な魔法なのさ」

野兎のように飛び跳ねながら、シエルはロウの前に躍り出て、その肩をぽんと叩く。

「ほら、こうやって一度触ったものなら——」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、少女の皮膚が波打ち始める。巨大な粘土が名匠の手でひとつの彫像に形作られていくように、あつという間にその体格が男性のそれになる。

そこに現れたのは、鏡にでも映したかのように精巧な、もう一人のロウだった。

「な？ すげえだろ。ちつたあ尊敬したか？」

誇らしげに自慢するその声も、先ほどの可愛らしい美声と違って、野太い男のものになっている。もっとも、汚い口調は相変わらずだった。

「見た目、大きさ、重さ、さらには触ったときの微妙な感じまで、すべてを丸つきり完璧に再現できるんだよ、オレたちミミックは」

澄み渡った湖に小石を投じたときのように、またもやシエルの体表は波打って、今度は黒髪の女性へと変貌する。ギルドにいたとき

に触れたのだろう。その姿はまさにクリスと瓜二つだった。

「うつふーん、どう？ あたしと『イイコト』してみない？」

「遠慮する。気色悪いことするな」

シエルの——というか、クリスの——妖艶な体を乱暴に押しつけてから、ロウはため息をついた。

（はあ……なんでもた、こんな面倒なやつに出遭っちゃったんだ）

大昔に絶滅したはずの精霊に出会えたことは、本来ならばとても貴重な体験であり、人によつては一生の宝物にするような出会いだ。しかし、この手の『異常な』生き物が幸運ではなく災難しかもたらしめてくれないことを、ロウは偽装屋としての経験からすでに学習済みだった。その証拠に、再び元の可愛らしげな少女の姿に戻ったシエルは、

「オレたちミミックはさ、ほら、人間をからかうっていうか、おちよくるっていうか……そういうのが生き甲斐なんだよね。ま、本能的にやっつ？」

などと、口になっている。おちよくられる方はたまったものではない。ロウの眉間のしわは、よりいっそう深く刻まれるばかりだった。

「ま、そんな深刻そうな顔すんなって。明るく行こうぜ、明るく。」

その方が人生、きつと楽しいぜ」

大声で笑いながら、深い夜であっても底抜けに明るいミミックが、先を進んでいく。嘆息とともに大きく肩を落とした偽装屋は、亡霊にでも取り憑かれたかのような淀んだ空気を身にまとい、とぼとぼとその後をついて行った。

二人が辿る川の周囲の地面は、次第にその高さを増していき、やがて切り立つ崖へと変貌した。谷底を進み、しばらくすると昼間くぐり抜けた洞窟を見つけた。月明かりだけを頼りに洞窟の内部を手探りで進み、ロウとシエルは再び古めかしい石造りの遺跡へとたどり着いた。

円形に切り取られた星空が、青年と少女の姿をくっきりと映し出していた。二人は中央の祭壇へと伸びる石橋の上を進んだ。

「やっと着いたか……で、鞆をどこにやったんだ？ まだここにあるんだろ？」

先に行く少女の背中をねめつけて、ロウは低い声で尋ねた。びくり、と少女の肩が跳ね上がり、中央の祭壇を前にして、ぎこちなく振り返った。

「えつと……まあ、あれだ。その、なんだ。ええと……」

「怒らないから正直に言ってくれ。あれが見つからないと本当に困るんだ」

優しく諭すというよりは、脅しに近い形で、再度、尋ねる。親に叱られた子どものように、シエルはあちこちに視線を泳がせ——よくできた石膏細工のように白い指先を、塔の下に広がる暗闇に向けたのは、ずいぶんと時間が経ってからだった。

「まさか！ 落としたのか、この下に！」

「怒らねえって言ったじゃんかよ。嘘つき——痛っ！ わ、悪かった悪かった、謝るってば。落ち着こうぜ、とりあえずさあ」

ぶたれた頭をさするシエルの横で、ロウは石橋の下に広がる暗闇に目を落とした。眼下には満月の輝きをしてもお照らし出されることのない、常闇の崖下が広がっている。距離にしていけばかりか、考えることすら拒否させる深さだ。

「拾いに行けるわけないだろ、こんなところ……」

ロウは、へなへなとその場に座り込んだ。全身が脱力して、言うことを聞かなかったのだ。

（災難にも程がある。いったい僕が何をしたっていうんだよ……）

絶望するロウの肩に、優しく手が置かれる。

「まあそんなに気を落とすなって、青年。たかが旅行鞆じゃないか。街でまた新しいのを買えばいいだろ？」

「そんな代わりの利く物じゃないんだよ、あの鞆は！ 知ったような口を聞かないでくれ——というか、全部きみのせいだろ！」

かみつくように激昂して、ロウはシエルをにらみつけた。この青年の穏やかな為人を知る者であれば、同一人物であることを疑って

しまうほどの激しい怒りだった。彼の憤怒の表情に恐れをなしたのか、シエルは一步退くと、わざとらしく肩をすくめてみせる。彼女の小さな肩がわずかに震えていたのは、月夜とはいえ口ウには見えない。

「は……はいはい。わかったわかった。わかりましたよ。取りに行けばいいんだろ、取りに行けば」

精霊の少女にしては精一杯の強がりを見せて――

「よつと」

――唐突に、祭壇から跳躍した。

「お、おい！ 危ない！」

シエルの華麗な跳躍は、ロウが谷底の濁流に飛び込んだときのようで、しかし飛び込んだ先は底の見えない塔の崖下である。とつさに伸ばした手をすり抜けて、石橋の下へと少女の体が落下していく。二秒と経たないうちに、金系の髪をなびかせた少女は穴底の暗闇へと姿を消した。

（この高さから飛び降りって、死ぬぞ！？）

気でも狂ったのか。自分が強く言いすぎたのがいけなかったのか。様々な思いが瞬時にロウの頭を駆け巡り、その顔が後悔で歪む。と、次の瞬間。

「……は？」

ロウは突如として吹き荒れた突風に目を細めた。巨大な鷲が一陣の風となつて塔の側面を駆け上がってきたのだ。その屈強な両足には、なぜか見覚えのある大きな旅行鞆がぶら下がっている。若き偽装屋が、たったいま何が起こったのかを理解するまでに、数秒ほどの時間を有した。

「……そういうことか。脅かすなよ、もう」

怪鳥の二本の足がしっかりと握った旅行鞆を受け取りながら、口ウは安堵のため息をついた。旅行鞆を持ち主へと返した怪鳥は、ばさりと音を立てて殊更に大きく羽ばたくと、再び少女の姿へと形を変えた。

塔から飛び降りたシエルが、鳥に擬態して鞆を拾ってきたのである。

「ん？ オレが飛び降りるもんで、びっくりしたんだな？ 驚いたんだな？ へへっ」

ロウの心配などどこ吹く風で、得意満面にシエルが胸を張る。だが、そのときにはすでに偽装屋の青年の関心は手元の旅行鞆へと移っていた。

「ああああ、こんなに傷ついちゃって。俺の大切な宝物なのに……」

赤子をあやすような動きで、あるいは恋人と戯れるような手つきで、ロウは長く苦楽をとにした旅行鞆をなで回す。その異常なまでの愛情表現を見て、シエルは眉をひそめた。

「お前、実はすっげえ気持ち悪いやつだったんだな……」

「うるさい！ 偽装屋の仕事道具だぞ、馬鹿にするな！」

偽装屋の装備品は、基本的にその人個人の嗜好が色濃く出る。とはいえ、だいたい似たような旅行鞆を持って活動している。つまり、鞆はそれだけ彼らにとって重要なものなのだ。野宿を何泊しようが、トランクひとつで済ませてしまうような職種なのだから、仕方がないといえば仕方がない。

おそらく何百年ぶりに人間を驚かせることに成功して、心底満足げなシエルをよそに、ロウはさっさと立ち上がった。

（鞆が見つかったんだから、もうこんなところに用はない。早いとこベルガノに戻って、宿で休もう……）

行きとは違い、帰りは長らく愛用してきた装備品がある。ロウは旅行鞆の中からランプと着火具を取り出して、明かりを灯そうとした。

と、その手が止まったのは、ちょっとした偶然の産物だったかもしれない。薄暗い視界の端に、満天の星空を見上げて立ち尽くすシエルを捉えたのだ。瞬き一つせず、哀愁漂う表情で夜空を眺める少女につられて、ロウも頭上を仰ぎ見る。

古の伝説に登場する精霊たち——彼らの名を冠した星座が、精霊

たち亡きいまもなお、夜の天空を埋め尽くしていた。

（グリフォン、ウィンディーネ、ドラゴン……ミミックの星座はあったっけな？）

遺跡の大穴によって真ん丸に切り取られた星屑の舞台に目を走らせ、しかしそれは隣で立ち尽くす精霊の少女が見ているものではないことに気づく。

（そうか、この子は――）

ロウは手元に目を戻すと、持っていたランプと着火具をそっと旅行鞆の中へと戻した。

明るくするのは、もう少し後でいい。人には暗くて静かな場所ので思い出に浸りたいときがある。それはきっと、精霊も同じなのだろう。

（そういえば、昔、こんな風に見上げてたやつがいたっけ……）

ロウの脳裏にも、ずっと以前の光景が浮かんでいた。気づけば、唇が勝手に言葉を紡いでいる。

「……帰れるさ、きっと」

突然の台詞に、シエルが惚けたようになった。

「えっ……？」

そんな精霊の少女をロウは優しい眼差しで見やった。

「きみ、竜髯島に住んでたんだろ？」

初めて出会ったとき、たしかそんなことを言われたはずだ。思い出に浸っていたシエルは、ゆっくりとうなずく。

「ああ、ミハエルと一緒に、少しの間だけだったけどな」

「気になってたんだけど、そのミハエルってのは？ 竜王？ なのか？」

「竜王……？ なんだそれ？」

シエルの疑問に、ロウはできるだけ簡潔な答えを模索する。

「そうだな……一言でいえば、竜髯島に住んでる王様ってところかな。地上の人間たちがつまらないことで戦争とかしないように、空からいつも見張ってくれてるんだ」

遠い目で、ロウは空を見上げる。落し子たちは皆、竜髯島に住まう彼に会うために、竜髯島を目指して孤独な旅を続けているのだ。蛟竜騎士団の弾圧にも、土地の人々の無理解にも負けず、ただ黙々と。

「ああ、そういうことが……」

黄金色の長い髪を夜風になびかせて、少女はつぶやいた。

「ミハエルもいつも言ってたな。戦争なんて馬鹿げてるって」

細められた目は、かつてそこにあったはずの、巨大な浮島の影を見ているようだった。

「竜髯島に帰りたい？」

ロウの問いかけに、シエルは珍しく素直にうなずいた——弱々しく、しおらしく。

「……どうしようかな。オレ、これから」

それは月明かりの下では消えてなくなってしまうような、小さな声だった。乱暴な言葉遣いで気丈に振る舞ってはいるが、仲間の精霊たちがいなくなってしまった世界——とりわけ、ミハエルとかいう人物のいない世界が、彼女にとって孤独なものであることに変わりはないのだ。

（さっきまでは強がってただけ、か……まるで、昔の？あいつ？を見てるみたいだな）

何を思いだしたのか、ロウはくすりと笑って、

「そうだな、ひとまず僕と一緒に街に戻ろうか」

「えっ？」

意外な申し出に、シエルは呆然とする。ロウは至極当たり前といった感じで、

「僕は偽装屋だよ。竜髯島を目指す者の手助けをするのが、僕の仕事だ」

そして、手に持った旅行鞆を得意げに叩いて見せた。

「しばらくはきみの面倒は僕が見るよ。そのうち、落し子と会うこともあると思う。そしたら、彼らについて行くなり、好きにすれば

いい。彼らなら、竜髯島に行く方法を知っているかもしれない」

「それはありがたいけど……いいのか？」

「言っただよ。僕はきみみたいな人を助けるのが仕事なんだよ。今までに何人もの落し子が竜髯島にたどり着いてるんだ。きっとあるさ、きみが竜髯島に帰る方法も」

本当はそれ以上に、志半ばで倒れる落し子の方が多いのだが——いまは二人とも、厳しい現実より甘い夢を見ていたい気分だった。

「ああ、そうだな。きっと帰れるよな……」

どこか遠くを見るように、シエルはまた目を細めた。

柔らかな桜色の唇が小さく『ありがとう』と動いたことに、ロウは気づかないふりをしていた。

第六幕

偽装屋にとって『仕事』といえば、それは落し子が人目をはばかつて通りそうな偏屈な場所に宝箱を置いたり、または落し子の旅路の障害となるものをあらかじめ撤去しておくことを指す。そして、そんな偽装屋もまた落し子たちと同様、各地の蛟竜騎士団の弾圧とそれに同調した市民からの差別に遭っているのが現状である。ゆえに、彼らが特にメリットもない大きな街に滞在するときというのはたいてい、協力的な街の有力者によって設けられたギルドから仕事の報酬を受け取る目的がある場合に限られる。

貰うものを貰った後は、すぐにでもその街を立ち去らなければ、大きな街であるほどに蛟竜騎士団に見つかる危険度も増す。もちろん、熟練の偽装屋ともなれば、人であふれかえった異郷の街に自身を同化させるずべを持っているものではあるのだが。

とはいえ、やはり蛟竜騎士団が駐屯しているような場所に長期間、よそ者が滞在するのは好ましいはずもなく——その意味で、愛用の旅行鞆を取り戻した翌朝、ロウが取った行動というのは少々、常識を逸脱していたかもしれない。

「お前さ、面倒見てくれるって言うてくれたのはうれしいけど……別にそこまでしてくれなくてもいいんだぜ。ミミックは人間と違って純粋な息吹があるから、そんな毎日食べなくても生きていけるし……」

「きみは大丈夫でも、僕はちゃんと真面目にお腹が減るんだけどな。『食い扶持』って言葉があるだろう？」

「そりやそうだけどさ。でも——」

朝のベルガノの喧噪を歩くシエルは、申し訳なさそうに隣のロウをうかがった。

「なにも、この街で仕事探さなくてもいいじゃねえか……」

早朝、クリスに適当な服を見繕ってもらったシエルは、ロウと出

会ったときに身につけていた薄絹の神秘的な格好ではなく、地味な町娘の風情をしている。クリス曰く、基が美人な女の子は目立たない格好をした方がかえって好感度が上がるのだという。

それはともかく、彼女が申し訳なさそうにするのも無理はない。

ロウは今朝からずっと、ベルガノの街で教師としての就職先を探しているのだ。

「勘違いしないでくれよ。なにもきみのためだけに働き口を探しているわけじゃないんだから」

ロウは新調したつばの広い帽子を浅く被って、手に持った紙の束をめくっていった。そこには交易や手工業で財をなした富豪たちが、自分の子どもに質の高い教育を施すために募集している家庭教師の求人情報が載っていた。

「おつ、これなんかよさそうだな。相手は九歳の女の子か……残念、守備範囲外。ま、給料と待遇はよさそうだけど」

冗談交じりにそんなことをつぶやきながら、ロウは人混みの中を縫うように歩いて行く。慣れた足取りの彼の後ろをついていくだけで、シエルは必死だ。久しぶりに大勢の人間の中を歩くせいか、道行く人々に何度も肩をぶつけては謝っている。

「じゃあ、何のために働くってんだよ。金が必要だから働くんだろ？ それくらいミミックにだってわかるぞ」

シエルは昨日、ロウが偽装屋としての報酬をギルドから貰っていることを知っている。にもかかわらず働き口を探しているのは、自分のような者の世話を見ると言ってしまったからではないかと、この少女なりに居心地の悪さを感じているのだ。

（ずっとその調子だったら、少しは女の子っぽく思えるんだけどね……）

ロウは苦笑して、ぽんとシエルの頭に手を置いた。

「きみって、そういうところはほんと、人間よりも人間らしい考え方してるね。うん、そのままいて。かわいいから」

「う、うるさいっ！ からかうな！」

置かれた手を払いのけて、シエルはむすつとした。

「ごめんごめん。あのね、別にお金に困ってるわけじゃないんだ。働く目的は、なにもお金だけに限られるわけじゃないだろ？」

「そ、そうなのか？　じゃあ、何のために働くんだよ」

「まあ働くことの意義の大半が、それで得られる収入だつてのは否定しないけど。偽装屋としての実入りが少ないときは、副業として別の仕事をするのももちろんあるわけだし。偽装屋は職業柄、その道のプロになりすますことは得意だからね」

軽く自慢を織り交ぜながら、冗談めかしてロウは続ける。

「でも、僕が今回就職先を探してるのは、誰からも怪しまれずにこの街に滞在するためだよ。人間つてのは歳を取ると、働ける年齢なのに働こうとしない者への風当たりを強くして、集団としての秩序を保とうとするものだからね……って、意味わかる？」

「……いや、さっぱり」

頭痛でも起こしたように頭を抱えるシエルを見て、ロウは小さく吹き出した。

「要するに、働かざる者食うべからずってことだよ。偽装屋なんて端から見れば家も地位も財産もない、ただの乞食だから。別に蛟竜騎士団がいなくなつて、汗水垂らして働いてる人たちからは非難的なんだ」

ロウは持っていた紙の束をまとめて折りたたむと、ベストのポケットに乱暴に突っ込んだ。

「でもこうやって、ポーズだけでも勤勉なふうを装ってたら、世の人々からの接せられ方も変わってくるのさ。そのうち、きみにもわかってくるよ」

「ふうん……人間って複雑なんだな」

「その一言で説明できてしまうところは、逆に単純って言えるかもしれないけどね」

笑いながら、ロウは立ち並ぶ店の一軒を指さした。

「息吹があつても、嗜好品としてご飯は食べておきたいだろ？　せ

つかくなんだし、この街の名物を食べとかないかい？」

彼の指の先には郷土料理の看板を掲げた軽食屋がある。ロウはシエルの返事も待たずに、その手を握って店の中へと入った。

「いらつしゃい。お二人さんですね。あんたあ、二人前だよお！」
店に入るなり、中年の女性が大声で厨房へと告げた。お決まりの一品しかメニューに載せていないので、客の注文を聞く必要がないのだろう。そういうところは、食事に面倒な手間と時間をかけてもられない職人が多い産業都市ならではといえる。

二人は女給に案内されて、壁際のテーブルへと腰を下ろした。

「あら旦那、こんなべっぴんさん連れちゃって。彼女さんかい？」

世間話のつもりか、水差しとコップをテーブルの上に置きながら、中年女性が尋ねてきた。ロウは微笑を浮かべながら、当然のこのように答える。

「いえ、違いますよ」

それを聞いて、向かい合って座ったシエルが、いたずらっぽく笑う。その顔を人間の言葉に通訳するなら、『ん？ 別に「俺の女だ」くらい言っただっていいんだぜ？ 言えるだけの度胸があるならな』といった具合だろうか。しかし、差し出された水に口をつけながら、ロウはさざりと言いつ切る。

「こいつは、妻です」

「ぶはっ！」

目の前で、その？妻？が盛大にむせ込んでいた。

（よし、これをネタに後でたっぷりからかってやろう）

何気ない表情の下で密かにガッツポーズを決め、ロウは一人笑った。シエルも無理やり作り笑いをする。つられて、女給も笑顔になった。

「こりゃまた、いい女をモノにしたもんだねえ。大事にしなよ。ところで、この街には旅行の途中か何かで寄ったのかい？」

どうやら世間話が好きらしく、女給はテーブルの横に居座り続ける。昼時には少し早く、店内に客がほとんどいないということもある。

るからだろ。ロウは慌てず、平然とうそぶいた。

「仕事を探しに来たんですよ。そろそろ私も落ち着いた暮らしがしたいと思ひまして。これまではその日暮らしのところもありましたし、妻にも気苦労をかけてきましたから……この街で教師の職に就こうかと思っています」

そしてまるで愛しい者を見るような目つきで、シエルの方を見た。そんなロウの様子に、すっかり感心したのか、中年の女給は、

「ほお、そうなのかい。それじゃ、景気づけにオマケしちゃうかね」

と、愉快そうに笑いながら店の奥へと姿を消した。きつちりと結ばれたエプロンの紐が垂れる、その後ろ姿を見送りながら、

「……な、言つたとおりだろ？ 生真面目な人間って印象だけで、おまけしてくれるってよ」

「て、てめえ、いきなり変なこと言いやがつて！」

親の仇でも見るような目つきで、『妻』がにらんでくる。

「ははは、まあそう怒るなよ。こうやって何かになりきるのも、偽装屋の特技なのさ」

「嫌なやつだな。冗談でも言つていいことと悪いことがあるだろ。」

……それともなにか？ 冗談めかして、オレを口説いてるつもりか？」

してやられた恨みからか、無理矢理にでも反撃したいらしい。ロウはそんなシエルの言葉を、ばつさりと斬り捨てる。

「僕はきみみたいな女つきのない子は好きじゃないから。口説くなんてあり得ないよ。僕の気を引きたかったら、もう少しお淑やかで色っぽくなることだね」

「お淑やかで色っぽくねえ……酒場の黒髪みたいに、か？」

「酒場の黒髪？ ああ、クリスさんのことか——そうだね、本当に妻にするならあいうタイプがいいな。きみとは正反対で、実に女性的で魅力的な人だ」

すると、シエルはいきなり腹を抱えて笑い出した。

「ぎやはははっ、マジで？ お前、あんなのがいいの？ うっわぁー、変わってるわ。っーか、終わってるわ」

好みの女性を馬鹿にされ、ロウはむっとして少女をにらむ。

（なんだって急に馬鹿笑いを始めたんだ……？）

ひとしきり笑って気が済んだのか、ようやくシエルは目尻を拭いた。涙までにじませるとは、いったい何がそんなに可笑しかったのだろうか。

「あーあ、でも残念だよなあ。よりによって、あいつが好みとはなあ」

「残念？ なにがだよ」

「だってさ——」

一呼吸ためて、シエルは躊躇なく言い放った。

「だって、あいつ『男』だぜ」

「げほっ……ま、まさか！？」

傾けていたコップをそのままひっくり返さん勢いで、今度はロウがむせる番だった。

（いったい何を冗談言ってるんだ？ あの艶やかな長い黒髪。おつとりとした声。豊満な体つき——どれをとっても、クリスは理想的な女性だったじゃないか！）

だが、ロウが慌てる様子を楽しむように、シエルは満悦している。「詰め物をすれば男でも胸は膨らむし、訓練次第じゃ色っぽい声も出せるだろ。何かになりすますのは偽装屋の特技だったんじゃないかなっただけな？」

「だ、だからって……いや、まだ女装だと決まったわけじゃないだろ」

なおも認めようとしないロウに、シエルは不適な笑みで答える。

「忘れたのか？ オレは一度、あの黒髪に？ 擬態？ したんだぜ。あいつの体のことだったら、お前なんかよりもずっとわかってるんだよなあ」

昨晚、街の外でミミックの擬態について話していたときのことを

思い出し、ロウは背筋が凍る思いだ。

（そうだった。この子は一度触れたことがあるものなら、何にでも完璧に変身できるんだった。だとすると、本当にクリスは……）

否定のしようがない結論に辿り着いて、若き偽装屋はがつくりと肩を落とす。蛟竜騎士団からの弾効を避けるためにも、偽装屋が日常的に変装しているというのは別に珍しいことではない。シェイプシフター・ギルドを営む者も同様だ。だから彼女——いや、彼を非難することなどできはしない。非難するとしたら、変装を見抜けずに惚れてしまった自分の甘さだ。

自己嫌悪を重ねて憂鬱になるロウと、彼とは正反対にこの上なく幸せそうなシエル。向かい合う二人はまさに対照的だった。そこへ、先ほどの女給が料理を運んできた。

「はい、お待ちとおさま。いいところのお肉をオマケしといたよお」
二つの大きな皿に、ベルガノの名物料理が乗っている。小麦粉を練った生地の上に炒めた肉や野菜をふんだんにのせた、独特のパイ料理だ。鼻孔をくすぐる肉汁の香りに、シエルは待つてましたといわんばかりの舌鼓する。

——が、何を思ったか咳払いをひとつして、急に声色を変えた。女給にもはつきりと聞こえる声量とともに『妻』はロウに向き直る。

「ひどいですわ、あなた……わたくしの話を信じてくださらないばかりか、あまつさえ他の女性に気を許すなんて。ベッドで痛い目に遭っても知りませんことよっ」

そして、目尻を拭うそぶりを見せる——あくまで、そぶりだけだ。シエルの声は明らかに猫を被っていたが、女給の興味を惹くには十分だったようだ。

「おやまあ、痴話喧嘩かい？ 浮気は駄目だよ、お客さん」

衝撃の事実に打ちひしがれているロウはそれどころではないのだが、中年の女給はさらに続ける。

「こんな別嬪の奥さんなんだ、大切にしなきゃあ。そうだ、いいところを教えてあげるよ。今度、新しくこの街に大きな劇場ができる

んだよ。そこに連れて行ってやんな。この街はただでさえ遊ぶ場所が少ないから、しっかりご機嫌取って、逃げられないようにしないとねえ」

大きな声で笑って、女給は店の奥へと戻っていった。

「あら、いいお話を聞けましたね……へへ、こいつはしっかりご機嫌取ってもらわねえとな。ま、劇場なんかよりも、あたしはこっちがいいけど」

声色を元に戻したシエルが、ロウの前に置かれた皿にも手を伸ばす。パイ生地の上から一際大きな肉の切れをつまむと、あんぐりと口を開けて、幸せそうに噛みしめた。

「うおっ、うまい！ やっぱ料理ってのは腹を満たすもんじゃなくて、味を楽しむもんだな。うん、オレは気に入ったぞ、これ」

肉汁を滴らせてパイにかぶりつくシエルを前に、ロウは言葉を返す氣力すらなかった。

第七幕

ベルガノに正午の陽光が差し始めた。街で手工業に従事する人々が、精密な道具と化した達人の手を休め、昼食をとり、店の外へと出てくる時間だ。この街の技術力の高さを物語る寸分の狂いなく敷き詰められた石畳の路地が、今日も平穏な空気の下で人の流れを支えている。

食事の時間をずらしたために、ゆつくりと名物料理を腹に収めることができたロウとシエルは、すっかり満腹になった腹をなでつつ軽食屋を出た。

「ほんと、よく食ったな。食べなくても大丈夫、とか言ってたのは何だったんだ？」

「いやあ自分でも驚いてるくらいだね。長いこと何も食べてなくて久しぶりだったからかな。やっぱり美味しいものはいいよなあ」

何百年ぶりの食事を終えたシエルは、これ以上なくご満悦である。彼女は自分に出された料理に加え、ロウの皿に盛られたパイまで食べたばかりか、さらにおかわりを注文して、そのすべてを見事平らげてしまったのだ。

「こりゃあ何か礼をしないとイケねえか。そうだな……あたしと『イイコト』するかい？」

「店の中でも言っただけ、そういう冗談はもう少し女らしさを手に入れてからにしてくれよね」

ロウはもはや真面目に答える気にすらなれずに、ぶっきらぼうに返した。そもそも、ミミックに男や女の区別はあるのだろうか。精霊の性事情には詳しくないし、詳しくなるうとも思わないので、あえてそこはつつこまないでおく。

張り合いのない返事に、シエルは形のよい胸をこれ見よがしに突き出して、腰に手を当てた。

「ちよっと、ロウくんロウくん。お忘れかもしれないけど、オレは

ミミックなんだぜ。お前の好みの女にだって完璧に擬態できるんだ。別にこの姿のままでなくたっていいじゃないか。馬鹿だなあ」

「なるほど……それもそうだね」

「ほら、誰かいらないのか？ 黒髪野郎に擬態するのも、気味が悪くて嫌なんだろ？ 他に誰か好きな女はいらないのか？」

問われて、ロウはしばし黙考した。

（好きな女、ねえ……）

記憶の底から一人の女性が脳裏に浮かび——だがすぐさま、偽装屋の青年は逃げ出すように思考を停止させた。

「……やっぱり、遠慮しておくよ。いくら擬態が完璧でも、結局それは偽物だから」

「なんだ、つまんねえの。この意気地なし！ 本能の赴くがままに生きろよ、青年！」

「ごめんごめん……って、なんで僕が謝ってるの？」

「ははっ、知らねえよ。お前が勝手に——ん？」

冗談めかした談笑の続きは、ミミックの少女が自ら遮った。

「どうかしたのか？」

「しっ、静かに……何か聞こえる」

シエルは口元に人差し指を当てる。だが、二人がいるのは食事時の喧噪で満ちた大きな通りの真ん中だ。多少、耳を澄ませたところで、人々の行き交う音以外の何かが聞こえるわけでもない。

けれども、シエルは真剣な面持ちで聴覚に神経を集中させていた。誰かが『助けて』って言うてる……怪我してるんだ、きつと！」

「のっぴきならない一言で、ロウの瞳にも切迫した火が宿る。」「本当かい？ その声はどこからしてる？ 僕には聞こえないんだけど……」

「精霊の耳は人間の何倍も遠くの音を聞くことができるからな。お前の耳は無理だろうよ……でも、さすがに声が小さすぎる。たぶんこっちの方だと思う。行ってみようぜ」

シエルはロウの旅行鞆を持っていない方の手をつかみ、人混みの

中を分け進んだ。かつての勘を取り戻したのか、道行く人にはほとんどぶつかることなく速度を上げていく。

二人は角を曲がり、やや下り坂になっっている通りに入る。そこでシエルは一旦立ち止まって再度耳を澄まし、声のする方を確認してから、今度こそ確信を持って声の主の搜索を開始した。精霊ほど優れた聴覚を持たないロウはただ、彼女の後ろに付き従うばかりである。

このとき、ふとロウはシエルに触れた手のひらが温かいことに気づいた。精霊にも人間と同じ血が流れているのだという当たり前の事実を改めて思い知らされた。

やがて、薄暗い路地裏を抜けて、偽装屋とミミックは小さな橋へとたどり着いた。街の水源となっている用水路にかかる橋は、赤茶けた煉瓦で組まれている。この用水路の水は、昨日、ロウが飛び込んだ谷底の急流の末端に位置している。その用水路に目を走らせ、シエルは叫んだ。

「いた！ 橋の下！」

甲高い声を上げ、シエルは橋のもとへと続く傾斜を一気に滑り降りる。ロウも慌ててそれに続き、そこに横たわる影を発見する。

薄暗い橋のもとに倒れていたのは、まだ幼さの残る一人の少年だった。

「大丈夫か、おい！」

傍らにかがみ込み、シエルが少年を抱き起こす――途端、少年の口からどす黒い血がどばと吐き出された。生々しい鉄のにおいが鼻を突く。

赤い液体を直視したシエルの顔が苦悶に歪んだ。普段から血を見慣れていない者がいきなり大量の出血を見たのだから、嘔吐感に襲われても無理はない。だが、華奢な精霊はその美しい体を人間の血で汚しながらも、少年の体を支え続けた。

「しっかりしろ！ 大丈夫だからな！ こんな血……こんな血くらいなんだ！ すぐによくなるから。な？」

そうはいっても、所詮は医学をかじったことすらない素人である。目に見えて衰弱していく少年を腕に抱え、シエルの目は狼狽の色が浮かぶのを隠せない。

「無理に起こそうとしちゃ駄目だ。そのまま支えてて。僕が診るよ——応急処置くらいなら、僕にだってできるから」

ロウは偽装屋としての知識を総動員して、少年の体を観察した。本当はそんなことをするまでもなく、若い命が潰える未来は見えていたのだが、それでも、隣で泣き顔を必死に堪えて少年を励まし続ける少女の姿に、ロウは自分にできる精一杯のことをやろうとしていた。

すると、少年が弱々しく喘いだ。

「俺の……ことは……いい……」

ごぼっ——また血の塊を吐き出す。

「何も喋るな。大人しくしてろ、助かるものも助からないぞ」

「自分の体だ……自分がよくわかってる。もう……俺は助からない……偽物の希望なんて……要らないさ。それより……同情してくれるなら、頼みがある……」

少年は橋の影から見える空に向かって、左手を伸ばした。その甲には、うつすらと竜の形をした模様が浮かんでいた。

（これは……落し子の『竜の痣』！）

だが、本来ならば黄金色に輝いているはずのそれは、なぜか墨で塗りつぶしたようにくすんだ黒色をしていた。

「いったい何があったんだ？ こんな色をした竜の痣なんて見たことないぞ」

「奪われた……やつに、息吹を……。なあ、頼みがある……」

少年は最期の力を振り絞って、シエルの腕の中で上体を起こした。

「ヴァ……ミリオ……を、止めて……くれ」

「おい、しっかりしろ！」

きらり——竜の痣が一瞬だけその輝きを取り戻したように見えたが、しかしすぐに光を失って、少年の手の甲から完全に消滅した。

と同時に、少年の体がかくりと崩れ落ちる。四肢をだらしなく地面に投げ出した少年の体は、まるで糸の切れた操り人形のように魂を感じさせなかった。

「うそ……いやだ、こんなの……」

シエルはただ呆然と、自分の腕の中で冷たくなっていく骸を見つめていた。血だまりの中にへたり込み、か弱い両腕で繰り返し少年を揺する。何度も、何度も。しかし、返事が返ってくることは永遠にない。

見ず知らずの他人の死に涙を流す少女の隣で、ロウは少年の最期の言葉を反芻した。

「『ヴァーミリオン』を止めてくれ、だと……?」

息絶えた落し子から何かを託された偽装屋の傍らで、言葉を失った屍を抱きかかえる少女の頬を一筋の涙が伝い落ちていった。

第八幕

その日、ベルガノの街が夕焼け色に染まり始めた頃。宿屋の地下にある酒場に若い偽装屋と精霊の少女はいた。

まだ準備中の酒場の中で、若い偽装屋はややサイズの合っていない黒と白の燕尾服に身を包んでいる。まるでどこかの貴族が晩餐会にでも行くかのような優雅さで、滅多に身にまとうことのない礼服を見事に着こなしている。その隣では、精霊の少女が眉目麗しい藤色のドレスを身にまとうている。こちら豪奢な装飾に負けず劣らずの美貌をふりまいて、それでいて決してけばしくはなっていない。

着飾った二人の男女をカウンターの内側からつまらなさそうに眺めながら、長い黒髪を頭の後ろで一つに結わえたクリスはつぶやいた。

「いいなあ、劇場のこけら落としを見に行けるなんて。うらやましい」

劇場——正しくは、その名を『ヴァーミリオン劇場』という。蛟竜騎士団の創設者、ヴァーミリオン・マトライトの名を冠する劇場であり、この度、ベルガノの街に新しくつくられた大規模な建造物だ。今夜はそのこけら落とし、つまり初めての公演だ。

『ヴァーミリオン』を止めてくれ。

橋の下で息を引き取った落し子の少年の話が何を意味するか、それを確かめるために、ロウはクリスに頼んでヴァーミリオン劇場へと忍び込む計画を練ったのだった。

忍び込む、といっても、裏からこっそり入るわけではない。偽装屋の特技を活かし、正装に身を包んで招待された街の有力者の御曹司を偽ることで、堂々と正面から中に入るのである。

だが、一つ問題が発生した。シェイプシフター・ギルドの縁故で手に入った観劇の招待状は、ペアチケットだったのだ。さすがに、

これを使つて単身潜入するのは怪しすぎる。

そこで、白羽の矢が立つたのが、ミミックのシエルだった。いざとなれば何にでも擬態して逃げ出すことができるためである。

「なんかこのドレス、これ見よがしにヒラヒラがついてて恥ずかしいな。オレみたいな清楚で可憐な乙女は、こんなものつけなくても十分かわいいつての」

そんなことを言いながら、シエルは照れくさそうにドレスの裾を何度も確認しては頭を掻いている。

(どの口が清楚とか可憐とか言うんだよ、まったく……)

致し方ないとはいえ、シエルを連れて行くことになってしまったロウは、重いため息をついた。ロウ個人としては、いくら彼女に擬態の能力があるとはいえ、無関係な人間もとい精霊を自分の仕事に巻き込みたくはなかったのだ。それでも、シエルの同伴をしづしづ認めざるを得なかったのは、シエル自身がしつこく食い下がってきたからだ。彼女なりに気を遣ってくれたのだろう。

とはいえ、本当に巻き込んでよかったものだろうか。額に手を当てて考えあぐねているロウを見て、クリスが甘えるような声ですり寄ってくる。

「ねえ、ロウ……べつにわたしと行つたっていいのよ？ シエルちゃんのドレスだって、もともとわたしに着ようと思って買ったものなんだから。わたしも劇が見たいわ」

「いや、そういうわけにもいかないだろ。このチケットをくれたって人、チケットを譲る代わりに、きみと二人きりでお酒を飲むっていう条件を出してきたらしいじゃないか。きみは彼の相手をしてない……もつとも、きみが男だって知ったらショックだろうけどね」

台詞の後半は、やや自嘲めいた響きを含ませている。クリスは意外そうに目を見開くと、艶めかしい顔を一転させて、いたずらっぽく頬を膨らませた。

「あら、ばれちゃつてたの。なあんだ、つまんなーい」

「ほ、本当だったのか……」

思わず本音が口から出てしまった。クリスに擬態したことのあるシエルに言われても、ロウは心のどこかでまだクリスが女性であるという希望を抱いていたのだ。決して自分は、女のふりをした男に惑わされたわけではない、と。

だが、その希望もたつたいま、本人によって打ち崩されたのだった。

「なあに、鎌かけたの？ オカマだけに？」

「あつはつは、それマジうける。おもしれえな、お前」

「ぜんっぜん、面白くない！」

馬鹿笑いするシエルを小突いて、ロウは意気消沈した。

（最悪だ…… 何かに取り憑かれてるんじゃないか、最近の僕は）

カウンターに片肘をつき、クリスは反省した様子もなく高らかに笑う。

「そうはいうけど、そのお陰で今回のチケットだって手に入ったんじゃない。お客さんからの評判いいし、いいことづくめね。わたしったら毎晩のように口説かれちゃうんだから。ベッドまでお相手してあげられないのが残念だけど」

「……と、とにかく今回の作戦だ」

頭を振って、ロウは話題を切り替える。

「チケットは用意してあるし、変装もした。僕とシエルはほとんど街の人には知られていないから、まずばれることはないだろう。僕は金持ちの家の道楽息子を演出するので、特に問題はない。問題になるのは……」

ロウはびしつとシエルを指さす。

「問題はきみだ。いいかい、きみは僕が金で買っている女のふりをするんだ。道端で仕事帰りの貧乏人に声をかけているような娼婦ではなく、自らを洗練された美で演出し、上流階級だけを狙って体売る商売女の演技だ」

「あんつ、そんな目で見つめちゃ……だめ」

「一流はそういう下卑た声は出さない。もっと真面目にやってくれ」

「んな、いまのどこが駄目なんだよ！ 迫真の演技だろ」

やれやれ、とロウは肩をすくめる。

「本物はね、言葉の端々に内面からにじみ出る優雅さってもんがあるんだよ。まあきみは黙っておけばそれなりに美人だから、何も喋らなければそれでいいや」

「てめえ、調子に乗りやがって……」

「やっぱり、わたしと行く？」

「……さて、次の問題に移ろう」

すり寄るクリスを軽く無視して、ロウは咳払いすると、

「やつかいなのは、劇場の内部構造がわからないことだ。本当なら図面を手に入れてから臨みたかったんだけど、チケットは今日分しか確保できていない。したがって、中に入ってから僕が単独で内部を探ることになる」

「あたしは？」

「上品に、ただひたすら上品に——黙って席に座っててくれ」

「むっ、それだけか」

「それだけだ」

言い切って、ロウは旅行鞆をクリスに差し出す。

「さすがにこの格好にぼろぼろの鞆はまずいからね。大切な商売道具だ、預かってもらえないか？」

「もちろんよ。それじゃ、気をつけてね」

それだけ見れば完璧な女性の微笑みを浮かべるクリスに、ロウは強く頷き返し、

「せいぜい、事の真相を暴いてくるさ——行くよ、シエル」

「おう！」

威勢のいいかけ声とともに、若き偽装屋と精霊の少女は、ギルドを後にしたのだった。

第九幕

手工業で発展した場所につきものな問題が、娯楽の選択肢の少なさである。

街の住人といえば職人氣質の汗臭い男たちばかりなので、娯楽施設としてつくられるものといえばせいぜい、賭博場か娼館くらいしかないのだ。否、それくらいしか利益を出せるものがない、といった方が正しいのかもしれない。

もちろん、彼ら職人たちの出資者である富豪や街の政治を司る議員たち、そしてわずかばかりの貴族たちも、街にはいる。しかし彼らは、賭博場にしろ娼館にしろ体面にかかわるので、堂々行つて遊ぶわけにはいかない。そうなつてくると、自分の屋敷に人を招いてパーティーを開いたり、要は自主的な娯楽が中心となつてくるが、パーティーといっても毎晩毎夜、開くわけにはいかない。産業都市として十分に大きくなつたベルガノの街には、職人たちの家族や上流階級の人々が羽を伸ばせるような娯楽が必要だつたのだ。

そういう背景もあつて、劇場は街の住人から渴望されていた。

けれどもここで、新たな問題が浮上してくる。大規模な建造物を築き上げるためには当然、大型の金槌や鋸、釘などを大量に使用しなくてはならない。しかしこれらの道具に、徒影が反応してくるのである。徒影からしてみれば、それらの道具は武器となんら変わらないのだらう。たしかに金槌で人を叩けば死に至らしめることは容易ではある。

いくらベルガノの街が高い壁で覆われているとはいえ、もし徒影の大群が街を襲撃したら——やつらの本能のままに蹂躪されてしまうことは想像に難くない。そういうわけがあつて、街の議会は娯楽施設の必要性を重々承知していながら、なかなか劇場の建設に踏み切れないでいたのだつた。

そこに解決策を提示したのが、街の中心部に駐屯している蛟竜騎

士団である。劇場の設計から建設、そして一連の作業における街の安全確保まで、すべてを蛟竜騎士団が請け負う代わりに、街からの全面的な資金協力を要求したのだ。早い話が、『自分たちがつくつてやるから、お前たちは金を出せ』ということである。

議会はこれを承認し、建設作業は大きな問題もなく終了した。そうして出来上がったのが、今夜、初公演を迎えたヴァーミリオン劇場である。

「うひゃあ、すっげえ!!」

ロウの隣で、シエルが感嘆の声を上げた。金糸の長髪を頭の上で器用に結び上げた精霊の少女は、どこか伯爵令嬢であるかのような薄い紫のドレスに身を包んでいる。

(もっ、黙ってろって言ったたる。言葉遣い汚いんだから……)

無言のまま、ロウはシエルを小突いたが、そういう彼とではしゃぐシエルの気持ちかわからないわけではない。たしかに、人目をはばからず感嘆のため息をついてしまうほど、ヴァーミリオン劇場の外観はすばらしいものだったのだ。

混泥土でつくられた外壁は寸分の狂いもなく積み上げられており、来賓たちを威厳たつぷりに見下ろしていた。入り口には一対の蛟竜の彫像が向かい合って鎮座しており、ここが蛟竜騎士団によってつくられたものであることを強調していた。空の上から見下ろすことができるならば、きれいな五角形を描いている劇場の中央には、天を突こうかというほどの高さがある巨大な塔が聳えている。

荘厳な雰囲気醸し出す幾本もの太い柱の間を通り、ロウとシエルは他の来賓たちとともに劇場の内部へと足を踏み入れた。内部のつくりも、外部同様、職人たちによって趣向を凝らされた一級の装飾で埋め尽くされていた。

木目の美しいオーク材でつくられた柵や扉が来賓たちの順路を示してくれ、広い廊下の片隅にはいったいどこから取り寄せてきたのか、色とりどりの花が飾られている。足下の大理石の床に敷かれた深紅の絨毯は、靴の裏からでもその柔らかな感触がはっきりとわか

るほどだ。

「失礼ですが、お客様。招待状を拝見させてもらえますかな」

あまりの美しさに呆然としていたロウに、背後から声をかける者があつた。振り向くと、燕尾服の紳士が丁寧にお辞儀をしてきた。

こちらにも燕尾服に身を包んだロウは、懐のポケットからクリスに用意してもらった一枚の紙片を取り出して紳士に渡す。

「あ、すみません——ええと、どうぞ」

「ありがとうございます。ふむ……では、どうぞ私についてきてくださいませ。お席へご案内いたします」

紙片を返してもらい、ロウとシエルは畏まって歩き出した紳士の後についてゆく。

（おっと、忘れるところだった）

ロウは目配せをしながら、シエルの方に肘を少しだけ出す。さりげない動作で、精霊の少女はロウの腕に手を置いた。どこからどう見ても、仲むつまじいカップルである。

「これくらいわたしにもできましたよ、旦那様」

ふふ、とシエルが微笑む——その十割が演技であることは、ロウだけが知るところである。

廊下を曲がり、紳士は後ろの二人に気を遣いながらゆつくりと階段を上っていく。細部まで装飾がこだわられた階段を歩きながら、ロウは広い視野を最大に使って、周囲の探索を忘れなかった。なにも遊びに来ているのではないのだ。偽装屋として仕事を果たさなければならぬ。

（意外と単純なつくりそうだな。これなら迷うことはなさそうだ）

廊下を進みつつ、ロウは安堵した。しかし、ほっとしたのも束の間、廊下の向こう側から厳めしい制服に身を包んだ数人の男女が歩いてくるのが見えた。第一ボタンまできっちり留められた緑青色の制服。落し子や偽装屋にとっての天敵の登場である。

（やはり、いたか……蛟竜騎士団！）

三人の蛟竜騎士団の騎士は、先頭を長身の女が歩き、彼女に二人

の男が付き従っていた。ロウは胸の階級章に視線を走らせ、電光石火の早さで全員分を読み取る。最も位が高かったのは、長身の女だった。蛟竜が絡みついた一本の剣。一等騎士と呼ばれる蛟竜騎士団の中でもかなり位の高い者をつける階級章である。そして、その階級章のすぐ横には――

（ベルガノの紋章……ってことは、この人がベルガノ支部の支部長か！？）

とんでもない大物を直接目にして、ロウは自分が震えているのを自覚した。

クリスによれば、ベルガノの街の蛟竜騎士団が以前よりも力を増し、周辺の偽装屋や落し子をいっそう強く弾圧し始めたのは、支部長が替わった直後からであるという。つまり、昨今の落し子や偽装屋への弾圧は、この女性が原動力になっているということだ。

すれ違った後、ロウは前を歩く案内係に、蛟竜騎士団の支部長について尋ねようとした――が、すんでのところで思いとどまる。

（待てよ、いまの僕は富豪の御曹司……ということは、蛟竜騎士団の支部長とは面識があって当然かもしれないな。だとすれば、ここで質問するのは奇妙だろうか？）

怪しい言動は極力控えなければならない――そう思って、ロウが残念そうに口を閉じたとき。

「先ほどのお方は、どなた様なのでしょう？」

おっとりとした口調で、傍らで腕を組むシエルが声を発した。

予想外の展開に、ロウは目を丸くする。やや前に行く紳士が振り向く前に、慌てて表情を取り繕いことができたのは僥倖といえるだろう。首だけこちらを向いて、紳士はにこやかに答える。

「蛟竜騎士団の騎士さまたちですね。お付きの方のお名前は存じ上げませんが……背の高い女性の方でしたら、この街の蛟竜騎士団支部長、アリシア・ル・ファレル様でございます。その……ご存知ありませんでしたか？」

こちらは予想された質問である。しかし、ロウにとっては予想の

範囲内でも、シエルにとってはどうだろう。心配の色を出来るだけ顔には出さないようにして、ロウは横目で傍らの少女を見やる。

精霊の少女は落ち着き払った面持ちで、微かに笑うと、こう言うのけた。

「ええ……蛟竜騎士団の皆様はお堅い方が多いものですから」

はにかむようにうつむく少女を見て、紳士は慌てて前を向き直った。触れてはいけない話題だとも思ったのだろう。お堅い方が多い——つまり、自分を買ってくれるような男がいない。そんな想像が出来る程度には、この紳士も遊び人ということだろうか。

その後、幸いにもすぐに観覧席に到着したため、三人の間に漂っていた微妙な沈黙は姿を消した。案内された観客席は二人用で、壁から突き出した小さなバルコニーのようになっており、豪華な椅子が一組用意されていた。

「では、私はこれにて失礼いたします」

折り目正しい礼をして紳士が去った後、ロウは感心してシエルを見やった。

「ありがとう。これでアリシアとかいう蛟竜騎士団の支部長の顔と名前がはつきり一致したよ。なかなか気が利くじゃないか」

「だろ？ オレを連れてきてよかったろ」

にひひ、と得意げに笑ってシエルは席に飛び乗った。

二人がいるバルコニー型の観覧席は劇場の二階部にあり、舞台が一望できた。これと同じ観覧席が、二階から四階にかけてあちこちに点在している。階下に目をやれば、一階には一般客用の狭苦しい座席がひしめいていた。

「さすが、金を払う客への待遇は格別だな」

「お前は何も払ってないけどな」

すかさず皮肉るシエルの頭をぽんと叩いて、ロウはきびすを返す。「これからその分の仕事をするんだよ。じゃあ、僕は内部の様子を探ってくるから。きみはのんびり劇でも見えて」

「そうしておくぜ。んじゃ、行つてらっしゃいませー」

ふかふかの席に腰を下ろしてご満悦なシエルは、ろくにロウの方を見ようともしないで、広い舞台や他の観客席の方に目を奪われたまま後ろ手を振った。

（ま、付き合わせちゃってるわけだし……劇中くらいは楽しませてやろうか）

「頼むから、ぼろは出さないでくれよ」

一言だけ言い残して、ロウはいま来た廊下へと舞い戻った。

第十幕

来賓席に座る赤毛の女騎士は、神妙な面持ちで腕を組んでいた。ヴァーミリオン劇場の三階。舞台ばかりでなく客席のほとんどを一望できる場所に、彼女の座る来賓席はある。蛟竜騎士団ベルガノ支部支部長アリシア・ル・ファレルは、その贅の限りを尽くした椅子に腰掛けていた。

劇場建設の一切を取り仕切ったのは、アリシア率いる蛟竜騎士団である。運営そのものはベルガノ自治会に委託しているとはいえ、この劇場にしてみれば、アリシアは決して礼を欠くことの許されない重要人物なのだ。

アリシアは獲物を狩る狼のような眼光で遠くの舞台を見やった。蛟竜騎士団の一個中隊に匹敵するベルガノ駐屯部隊を指揮する彼女にとって、このヴァーミリオン劇場は特別な意味を持っている。今宵の初公演の演目は、たしか蛟竜騎士団の創始者と初代竜王にまつわる物語であるはずだが、そのことも彼女の緊張を高めていた。

こういうときの彼女は見えない鎧をまとっているかのように近づくがたく、なかなか声を掛けづらい。先ほどから若い騎士が彼女の様子をしきりに背後から伺っているのだが、若輩者には威厳ある背中に声を掛けるだけでも躊躇してしまふようだ。

胃の縮む思いで勇気を振り絞り、ようやく彼が口を開いたときは、すでに観客のほとんどは席に着き、舞台の準備も大方整った後だった。

「ア、アリシア様。ご報告したいことがあるのですが……」
「……うむ」

すでに妙齢を過ぎているとはいえ、女性とは思えないほどの低い声で、アリシアはうなずいた。若い騎士は体の陰でもみ手しながら、冷や汗を垂らして言葉をつなげる。

「と、逃走しておりました例の落し子についてなのですが……」

しかし、ここでようやく自分の声がうわずっていることに気づいたのだろ。小さく咳払いして、騎士は上官の耳元へと口を寄せた。「……奴が西部の用水路付近で死亡したとの報告が入りました。巡回中の騎士が発見したそうです。それと、現場には奴以外の靴の痕跡も残っていたとのことです」

それは、聞こえるか聞こえないかというくらいに声を潜めた報告だった。にもかかわらず、アリシアの鋭い耳は一言ももらさずに、周囲の雑音の中から部下の言葉だけを聞き分けていた。

「わかった。すると、落し子の最期を看取った者がいるということか？」

「断言はできませんが、少なくとも死体は見られたかと。報告によれば、足跡は巧みに消されていたようで、死体を発見した騎士たちも危うく見落とすところだったそうですが……」

「そうか……」

アリシアは中高の顔をわずかに曇らせた。鋼鉄の剣の切っ先よりもなお鋭い双眸が細められる。

「偽装屋どもめ、何か感づいたか……？」

ベルガノの街に偽装屋の溜まり場があることは、アリシアもすでに気づいていた。これだけ大規模な街だ。ギルドがない方がおかしいともいえる。

だが、シェイプシフター・ギルドの存在がわかったところで、迂闊に手を出すわけにはいかない事情が蛟竜騎士団にはある。偽装屋たちがうまく街の有力者たちを取り込み、市民たちとの共存を図っているからだ。

彼らを安易に弾圧しようものなら、逆にこちらが干されることだって十分にあり得る。支持者の数では蛟竜騎士団が圧倒的に有利だが、今は無駄な争いは避けねばならない。

そう——『今は』まだ。

「……とはいえ、そろそろ動いて良いのかもしれない」
「えっ？」

若い騎士が問い返す。が、赤毛の騎士は応えなかった。代わりに不敵な笑みを浮かべると、隣に控えていた別の騎士へ、まるで子供にお遣いを頼むような口調で告げた。

「おい、例の宿屋を今から潰してこい。連中に明日の日の出を見させてはならん」

「……御意」

傍らの騎士は屈強な体を持ち上げ、席を立つた。報告に来た若い騎士が、恐怖にも似た畏敬の念を感じて、飛び退くように道を空ける。その前を筋骨隆々とした偉丈夫が音もなく通り過ぎた後、アリアは静かに独りごちた。

「計画の実行まで、当面の間、議員たちを騙しておかなくてはな。もう少しですべての準備が整うのだ、偽装屋ごときに邪魔はさせん」
その視線の向こう側では、ゆっくりと舞台のカーテンが上がっていくところだった。

第十一幕

バルコニー型の観覧席に据え付けられた絢爛な椅子に座って、シエルは劇が始まるのを、今か今かと待ち構えていた。柔らかな背もたれを無視して浅く腰掛け、足をばたばたとさせている姿は、まるで親の帰りを待つ子供のようだ。

こんな行儀の悪いところを口ウに見とがめられたなら怒られもするのだろうが、あいにく彼は近くにいない。偽装屋の青年は、蛟竜騎士団とかいうよくわからない組織を探るために、先ほど観覧席を出て行ったばかりだ。

からかう相手も、からかってくれる相手もおらず、シエルは手持ちぶさたこの上なかった。

（あーあ、早く始まんねえかなー）

ミミックは人間をからかってこそその精霊である。放っておかれるのには慣れていない。こんな自分がよく三百年もある男の帰りを黙って待ち続けられたものだとしに感心しながら、しかし久しぶりに人間たちと触れ合うことができてシエルの心は落ち着かなかった。

係の者でも呼びつけて、擬態の技を披露して遊んでやろうかとも思い始めたそのとき、ようやく舞台の上に動きがあった。臙脂色のカーテンがゆっくりと上がっていき、舞台袖から司会者らしき人物が姿を現す。

『皆さん、今宵は『ヴァーミリオン劇場』の初公演にお集まりいただき、まことにありがとうございます』

遠目に見ても決して大柄とはいえない司会者の男性は、広い劇場中に響き渡る驚きの声量をもって挨拶をした。

『この素晴らしい劇場の建設にあたりましては、ベルガノ議会様のご支援、そして街の治安を守ってくださいっております蛟竜騎士団様のご協力がございました。この場を借りて、お礼申し上げます。本当にありがとうございます』

司会者が深々と頭を下げる。それに伴って、会場から割れんばかりの拍手が鳴り響いた。

（んなこたあどうでもいいんだよ！ 早く始めろよ！）

声にこそ出さなかったが、シエルは地団駄を踏んだ。精霊の少女にとつて、この劇場が建設されるまでの苦難などどうでもいいのだ。だが、シエルの願いに反して、司会者は劇場が出来上がるまでの様々な道のことについてを語り始めた。建設にあたった職人たち、資材の運搬をした行商人たち、惜しめない資金援助をした富豪たちなどなど。延々と彼らの努力と功績について語った後、司会者は一人の女性を指名した。

『では最後に、我らの街の英雄、蛟竜騎士団の騎士様にご挨拶をお願いしましょう——蛟竜騎士団支部長、アリシア・ル・ファレル様です！』

司会者の招きに応じて来賓席から腰を上げたのは、緑青色の制服に身を包んだ長身の女性だった。獅子のたてがみのような立派な赤い長髪をなびかせ、堂々とした風情で舞台上上がる。そして司会者の大声量に負けず劣らず、よく通る声で観衆に語りかけた。

『ご紹介にあずかった、蛟竜騎士団のアリシアである。今宵、お招きいただいたことをまずは感謝したい。何か挨拶をせよと言われたのだが、いまさら多くを語る必要はないだろう。この劇場の建設にあたっては多くの汗と、そして血が流れたことは周知の事実だ。我らの同胞も、徒影たちとの闘いで多くが散っていった』

哀しみの中に強い意志を込めて、アリシアは続ける。

『涙を流した者、悲しみに暮れた者も多いであろう。しかし——否、だからこそ、今宵は存分に楽しもうではないか。皆様方の笑顔が、亡き同胞たちへの弔いの杯となるのならば！』

アリシアが語った言葉は、台詞としてはありきたりなものだったかもしれない。だが、三流の役者が言えば白けてしまうような陳腐な文句も、口にする者が替われれば命を吹き込まれるのだということ、赤毛の騎士は証明したかのようだった。

決して威圧ではない、限られた者しか発することのできないある種の威厳を、アリシアは間違いなく身につけていた。

このときばかりは、さすがのシエルも貧乏揺すりを止めて、アリシアの言葉に聞き惚れてしまった。

（人間にしちゃあ、なかなか立派じゃねえか……うおっ）

一瞬の静寂の後に、地鳴りにも似た拍手と歓声が巻き起こった。手を叩かない者などいない。そう思わせるほどの喝采だった。アリシアの演説が、観衆の心をつかんだ証拠だった。

アリシアは客席の様子を満足そうに眺めた後、舞台袖へと姿を消した。そして、劇場の照明が落ち、再び静寂が訪れる。暗闇の中、例の司会者の声だけが劇場に響いた。

『みなさま大変らくお待たせいたしました。それでは、ご覧戴きましょう——クローディア書き下ろしの戯曲？英雄と竜王？の始まりです！』

いつの間にか、司会者は声だけを残して姿を消していた。その後を、幾筋もの照明が照らし出した。奥に控えていた二枚目のカーテンが天井裏へと上がっていき、どこかの荒野を思わせる大道具が露わになった。

舞台袖から出てきたのは色とりどりの衣装を身にまとった役者たちだ。舞台下では背景音楽用のオーケストラが開演の音楽を奏で始めていた。

始まりを迎えたのは、蛟竜騎士団の成り立ちについての劇だった。どこからともなく、語り手役の声が客席に響き渡る。

『——はるか昔、ヴァーミリオンという名前の青年がいました』

おっとりとした口調で奏でられる台詞に合わせて、一人の青年が舞台の上で踊り始めた。どこかの農夫の役なのだろう。青年は粗末な衣服に袖を通して、鍬や鋤を使う演技がとても細かい。数人の農夫に混じって、青年は畑を耕していた。

『大陸には多くの村があり、街があり、そして大きな国がありました』

今度は、その王国とやらの騎士の役だろうか。仰々しい甲冑に身を包んだ役者が数名、舞台袖から躍り出て剣を振った。荒々しい演技は圧倒的で、手に持っているのは作り物の小道具であるにもかかわらず、剣戟の音が聞こえてきそうである。

『ある日、王国同士で戦争が起こりました。たちまち、大陸中が戦渦に巻き込まれました。青年の暮らしていた村も例外ではありませんん』

舞台の上が赤い光で塗りつぶされる。それは無慈悲な血の色か、はたまた家を焼く炎の色か。観客たちは想像力をかき立てられていく。

赤い光を受けて、役者たちの動きが止まった。刹那、オーケストラの演奏にいつそう熱が入る。荒々しい音楽の中で、役者たちが再び動き出した。

『ヴァーミリオンは王国の兵士に志願します。大切な故郷を守るため、青年は闘うことを決意したのです。そうして、幾年月が過ぎました』

舞台が一度、暗くなり、流れるような作業で大道具が入れ替えられた。

再び明るくなったときは、先ほど農夫の格好をしていた青年が、いくばくかの威厳とともに鎧兜を身につけている。

『ヴァーミリオンはもう立派な兵士です。一軍を率いて、敵国との戦争へと何度も赴きました。彼の向かうところ、必ず勝利がありました』

無感情であるはずの語り手の台詞にも、どこか誇らしげな響きがかもっている。舞台の上で剣を振る役者ならばなおさらだ。左右から襲いかかってくる敵の兵士を次々と切り伏せては、勝利の余韻に浸っている。

『しかし、彼の無敗の伝説は長くは続きませんでした——戦場に、新たな兵器が導入されたのです』

舞台の両脇から、色とりどりの布を身にまとった者たちが現れた。

数人でひとつの役を演じているのだろう。二人羽織、三人羽織は当たり前といった感じた。

それらを見て、シエルは思わず吹き出しそうになる。精霊の少女には、語り手が説明を加える前に、すでに彼らの正体がわかったのだ。

（ぷははっ、あれって精霊のつもりか！ うっけるー、ぜんぜん似てねえじゃんかよ）

赤い炎をまとった蛇石鳥コカトリス、巨大な蛸の形をした水影魔アーヴァンク、銀系のたてがみを持つ二角獣バイコーン……次々と異形の生物が姿を現す。しかし、現実にはそれらを見知っているシエルにとっては、どれも実物とは似ても似つかないものばかりだった。

蛇石鳥はもつと地味な灰褐色だったし、水影魔は蛸などではない。二角獣にいたっては、角の生え方が全然違っている。おおかた伝承のとおりに再現したつもりなのだろうが、人間の記憶など当てにはならない。

それらを指さしてひとしきり馬鹿笑いして、だがシエルはふと表情を曇らせた。

（そっか……みんな実物を知らないんだな。死んじゃったんだもん
な……）

人間たちが精霊について知識に欠けるのは、彼らがいま存在していない何よりの証拠だ。実際に生きた彼らを見ることができないのだ。

見てないものを演技することはできない。たとえ演じることができたとしても、それはあくまで己の想像に忠実なだけなのである。

そんなものは所詮、紛い物——偽物だ。

シエルは形容しがたい寂しさと虚しさを感じて嘆息した。舞台の上ではすべての精霊が登場を終え、すでに次の演出が始まっていた。『精霊たちを使役する魔法使い（ウィザード）の台頭によって、ヴァーミリオンのような普通の兵士は戦場で力を失っていききました。ときに大地を焼き尽くし、ときに街をまるごと水没させる魔法使い

たちに、普通の人間がかなうはずもなかったのです』

精霊たちに追い回されて逃げ惑う兵士たちは、やがて舞台の橋に追い詰められていった。舞台の中央では赤や青の乱舞が続ぎ、戦争はよりいっそう過激さを増していく。それを遠巻きに見ながら、肩を落として落胆する人間の兵士たちが、観客の同情を誘った。

『戦場での居場所をなくしたヴァーミリオンは、王国の城へと呼び戻されます。王様から与えられたのは、將軍として王宮の警護する任務でした。無差別に広範囲を攻撃してしまう魔法使いでは務まらない仕事に、ヴァーミリオンは新たな希望を見出しました』

再び、大道具の入れ替えが行われた。今度は背景までもが別のものと替わり、豪華な内装の城へと場面転換した。

『そこでヴァーミリオンは運命的な出会いを二つもします。一つ目は、名もなき少年との出会いでした』

舞台袖から、やけに陰鬱そうな少年が現れた——と、シエルは既視感に襲われた。

（あれっ、こいつどこかで……）

精霊の少女の動揺など知る由もなく、語り手は物語の進行を続ける。

『名もなき少年は魔法使いを目指していました。しかし、彼はまだ見習いの身で、王宮の雑用係をしていました。好奇心旺盛な少年は、ヴァーミリオンに戦場での体験を何度も尋ねます。そうやって語り合ううち、二人はお互いに通じるものを見つけました』

昼と夜の演出が幾度となく切り替わり、二人がどんどん親密になっていく様子を描写していった。

『二人が見つけた互に通じるもの。彼らはともに心の底から、世界の平和を願っていたのです。そして、同じ女性を愛していたのです。二つ目の運命的な出会い。王様の一人娘——王国の姫君との出会いです』

白い絹でできた清楚なドレスを身にまとった王女が舞台の上に現れたとき、観客たちの息をのむ音が聞こえた。

金系の長い髪を微風になびかせ、白磁のきめ細かい肌が輝く。ラピスラズリを思わせる青い瞳が見る者に安らぎを与え、繊細な指先は名匠による彫刻のようである。人間が女神を産むことができるなら彼女の姿に育つだろう、そう思わせるほどに洗練された美貌の結晶――

――シエルはその女性に、自分の姿を幻視した。

（あたしは知ってるぞ。こいつを知ってる！ ミハエルが好きだった女だ！）

もはやシエルにとって、この劇は他人事ではなくなっていた。バルコニー型の観客席から身を乗り出して、食い入るように舞台を見つめる。

同じ王国の王女を好きになった、魔法使い見習いの少年と、王国の將軍――間違えるはずもない。三百年経った今でも、シエルはこの構図をはつきりと覚えている。

（じゃあ、あの魔法使い見習いつてのが……ミハエル！）

精霊の少女の純粋な瞳が、歓喜にあふれて役者の姿を追う。本物ではない、似ても似つかぬ偽物だけれども――それでも、再会することができたのだ。これを喜ばずにいられようか。

「ミハエル…… やつと会えた……」

語り手によつて『名もなき少年』と紹介された魔法使い見習いの青年は、舞台の上でヴァーミリオンと友情をはぐくんでいく。互いに同じ女性のことを愛していたとは知らず、少年はある日、魔法使いとして戦地に赴くことになる。

『旅立ちの前夜、名もなき少年は王女のもとを訪れました。そして王女と秘密の約束を交わします。必ず迎えに来る――少年はそう言い残して、戦地へと旅立ったのです』

しかし、少年の消えた舞台の上で、残された王女とヴァーミリオンは互いの距離を縮めていった。俗世を知らぬ王女と、故郷を守るために剣をとったヴァーミリオン。二人の間に惹かれ合う何かがあったのは、誰の目にも明らかだった。

シエルは潤んだ瞳に蓋をするように、そつと目縁を閉じた。

依然、舞台の上ではヴァーミリオンと王女の恋物語が紡がれているが、シエルはそのとき名もなき少年が——ミハエルが何をしていたか知っていた。彼は血で血を洗う闘いを幾度も経験し、現実の虚しさに嫌気が差し、軍を抜け出して己の理想を追い求めていたのだ。（そして、あの森の奥でオレと出会ったんだ……）

シエルはミハエルと『最後の龍』^{エンシェント}との契約にも立ち会った。契約によって膨大な息吹を手に入れたミハエルが、空の居城となる竜髯島をつくるのにも協力した。そこで一緒に暮らしながら、彼の夢を何度も聞いたし、好きな女がいることも知った。嫉妬に身を焦がし、鳥に擬態してその女のところまで行つては触つて帰った。それからずっと、どこかの王女だとかいうその女の姿に擬態し続けた。

すべては、ミハエルという一人の男に、自分のことを振り向いてほしいがためにやったことだった。

（でも、あいつは……オレを置いて行つちまったんだよな）

きみを巻き込みたくない——ある日、神妙な面持ちのミハエルにそう言われた。彼に頼まれるがままに奇妙な箱に擬態した。王国式の棺だとかいうその箱は、多くの人々が大切に扱う物だから、擬態している限り誰かが来ても安全であるとのことだった。

箱に擬態してすぐに、ミハエルはどこかに行つてしまった。それからは毎日を無為に過ごした。何年も、何百年も。ただひたすら、好きな男の帰りを待ち続ける日々だった。

精霊と契約した者は千年の寿命を得ることができる。ミハエルを疑うのが嫌だったから、必ず自分を迎えに来てくれると信じて、シエルは待ち続けたのだ。

心のどこかで、物語の結末を予想しながら。

（オレは、この劇の登場人物にすらなれてないもんな……）

この感情をどう表現したものだろう。嫉妬だろうか。恠気に心が騒いでいる。

きつとミハエルは、王女を迎えに行つて竜髯島に連れ帰り、千年

の寿命を得て、いまでも二人で幸せに暮らしているのだろう。『最後の龍』との契約の力があれば、それくらい容易い。

（現実を受け入れよう。オレは捨てられたんだ……）

ミハエルの帰りを待ち続けたシエルを迎えに来たのは彼ではなく、偽装屋を名乗るまったく別の男だったではないか。熱いものがこみ上げてくるのも構わず、シエルはゆっくりと目を開いた。

舞台の上では、新たな展開が幕を開けていた。

『不毛な戦争は長きにわたって終わることなく、大陸の各地から精霊たちが姿を消していきました。もはや魔法使いでなくては戦場に近寄ることさえできないほど、戦争は激化したのです。ヴァーミリオンはこの戦いを終わらせるため、ひとつの決意をしました』

ヴァーミリオンは舞台の中央で思いを寄せる王女に剣を捧げ、空に向かって誓いを立てる。

『私がこの国の王になり、戦争のない理想の世界をつくる——ヴァーミリオンは王女に結婚を申し出ました。王女はそれを受け入れ、結婚式が行われることになりました』

なんとも童話的な、現実味のない話だろう。だがこれは三百年前、実際に起こった出来事なのだ。シエルは他の観客たちとともに、固唾を飲んで結末を見守った。

『結婚式の日、二人は何事もなく結ばれるはずでした。しかし、そこに思いも寄らない人物が現れます。かつて王国を旅立った、あの名もなき少年でした。息吹使いとなった彼は二人の前で自らのことを『竜王』と名乗ります』

結婚式場の大道具が林立していた舞台の上を、急に暗闇が支配した。

一筋の光とともに、『竜王』を名乗るミハエルが降り立つ。彼の周囲では、漆黒の外殻を持つ異形の生物がうごめいていていた。

『？徒影？』という強力な下僕を従えた竜王は、その場で戦争の終結を宣言しました。誰もが彼の言葉を疑いました。二十年以上続いた戦争をたった一人の息吹使いが終わらせることなどできるはずがな

い——しかし、実際に戦争は終わっていました。彼の喚び出した数え切れないほどの徒影たちによって、武器を持つ者たちは一人残らず殺されていたのです』

竜王は舞台の上で、王女を迎えに来たと言いつつ放った。恐怖のあまり誰も動くことができない中、ただ一人、竜王と王女の間立ちふさがった者がある。

王女の前で剣に誓いを立てた盟友、ヴァーミリオンだった。

『ヴァーミリオンはかつての友の前に立ちふさがりました。己の大切なものを守るために。彼は思い出したのです、自分が何のために兵士になったのかを。そして、こう叫びました——俺と一騎打ちをしろ！』と』

剣を振りかざして、ヴァーミリオン役役者が舞台上の上を自在に舞う。対するミハエル役役者は、杖を剣に持ち替えて、ゆっくりと構えた。

火花を散らす二人を、王宮の面々が固唾を飲んで見守り、その周囲をさらに幾体もの徒影が囲んでいた。どちらが優勢かは火を見るよりも明らかだ。精霊と契約した息吹使いに、いくら強いとはいえ普通の人間の男がかなうわけがない。

ヴァーミリオンは追い詰められ、ついには手に持った剣を叩き落とされてしまった。

わかりきった結末に、シエルは再び目を閉じた。

まぶたの裏に、あの日の——自分を置いていった日のミハエルの顔が浮かんでくる。

（もう、忘れよう……きつとあの二人は幸せに、竜孵島の上で暮らしてるんだ……）

涙がシエルの頬を静かに伝った、そのときだった。

——やめて！

王女役役者の声に、シエルははっと目を開いた。

気づけば、舞台が真っ赤に染まっていた。

オーケストラは演奏を止め、観客たちの息をのむ音が聞こえてく

る。

それは劇中の出来事のはずだったが、シエルにはもはや現実との区別などつかなくなっていた。

取り落とした剣に手を伸ばす、ヴァーミリオン。

彼に肉薄し、剣を突き立てようとする、ミハエル。

そして、二人の間に割って入り、ヴァーミリオンの盾となる……
金糸の髪の子。

（そんな……そんなまさか……！ やめろ……頼むから……）

三人の時間が硬直し——はじけた。

床の剣を拾い上げ、ヴァーミリオンの屈強な腕が唸る。

盾となった王女の横をすり抜けるようにして剣を突き出し——鋭
い切っ先が、ミハエルの胸に吸い込まれていった。

と同時。

「ミハエルっ……い、いやああああああっ！！！」

シエルの絶叫が、静寂の劇場に響き渡った。

第十二幕

ヴァーミリオン劇場に乾いた靴の音がこだまする。蛟竜騎士団の騎士たちの見回りを巧みに避けて、深紅の絨毯が敷かれた廊下を一人の偽装屋が滑るように進んでいく。

燕尾服を着たロウの姿は裕福な豪族の御曹司そのものだったが、彼の目は真剣そのものに周囲の様子を伺っている。装飾品の細かな違いさえも見落とさないように、幾度も眼鏡のブリッジを押し上げる。

（うーん、だいたい見て回ったけど……何もないなあ）

嘆息しつつも、ロウが歩みを止めることはなかった。彼の予想したとおり、劇場の内部構造自体は単純なものだ。ここが蛟竜騎士団の支部局ならばこうはいかないだろうが、一般に開放した劇場ともなれば下手に複雑なつくりにはできないのかもしれない。おかげで迷うことは一切なかったといえる。

一言で言ってしまうえば、ヴァーミリオン劇場はあまりにごく普通の劇場だった。何の変哲もない、逆にいえば特徴がなさ過ぎるともいえた。没個性的であることが、逆にこの上ない個性であるような、そんな奇妙な場所だった。

（やっぱり、あの落し子が言ってた『ヴァーミリオン』ってのはここじゃないのか？）

昨日、看取った少年を思い出して、ロウは頭を振った。

（いや、偶然なはずはない……あの少年の死と、重なるようにして初公演を迎えた劇場——偶然にしてはタイミングが良すぎる）

そしてもうひとつ、ロウは気になっていることがあった。昨日の落し子の手の甲から『竜の痣』が消えていたことだ。

無尽蔵にも思える息吹を生み出す、竜の紋章——それが『竜の痣』と呼ばれるドラゴンの形をした痣である。左手の甲で金色の輝きを放ち、息吹を使うときによりいっそう輝きを増す痣は、落し子であ

ることの証のようなものだ。痣は生まれたときから常に輝きつづけ、死ぬときになって初めて光りを失うという。いくら死の淵にあったからといって、息を引き取る前から痣が消えていたのは奇妙である（『ヴァーミリオンを止めてくれ』……いったいどういう意味なんだ？）

廊下の突き当たりを折れて、ふとロウは足を止めた。

足を止めたというより、足を止めざるを得なかったといった方が正しい。進むべき廊下が若い偽装屋の眼前で途切れていた。

行き止まりになった壁には、蛟竜騎士団の象徴である蛟竜が描かれた大きな絵画が飾られていた。

（行き止まりか……いや、待てよ）

ロウは周囲に誰もいないことを確認すると、素早く絵画へと近寄った。そして、重厚な額縁の裏にそつと手を入れる。

白い手袋をはめた偽装屋の指先が突起物を探し出し、器用にそれを跳ね上げた。

——カチリ。

乾いた音を立てて、何かが開く音がした。

（やっぱり、思ったとおりだ）

ほくそ笑んだロウが絵画をずらすと、そこに怪しげな階段が現れた。見たところ、薄暗い階段は地下へと続いているようだ。シェイプシフター・ギルドへの入り口にも似ている。ロウは迷わず足を踏み入れた。

（『竜の巢に入らずんば落し子を得ず』——蛟竜騎士団のことわざだったっけな？）

そんなことを考えながら、ロウは階段を下りていく。

どれくらいの時間が経っただろうか。辿り着いた先は、大きく開けた空間だった。

シエルを置いてきたバルコニー型の観客席から見渡せた一般用の客席をすべて足してもこれほどの広さにはならないだろう。歩いてきた方角と距離からして、おそらく劇場の中央部の真下に位置して

いるはずだが、それにしてもただっ広い空間である。

天井を支える柱といえば、その真ん中に聳える一本くらいしか見当たらない。いくらその柱が頑強だとしても、その一本だけで地上の重みを支えるのは不可能のはずだ。

と、そこでロウは自分のいる場所に思い当たって納得した。

ロウの計算どおり、ここが劇場の中央に位置するのだとしたら、たしかこの上には何もないはずだ。五角形の劇場の中央部には一本の巨大な塔が立っているだけで、その他の建造物は何もない。とすれば、この柱は劇場の外から見たあの塔の根元部分にあたるのだろうか。

ロウはもう一度、広間の中央に聳える巨大な柱を見据えた。無機質な塔の上部は天井を突き抜け、見えない空へと続いているかのようだった。それだけなら、大きさこそ異常だが、その他は何の変哲もないただの支柱だったろう。

しかし、問題はその台座部分にあった。

巨大な塔の下ですべての重量を支える台座部——そこが血のような色で、赤々と輝いていたのだ。小さな家ほどの大きさがある結晶質の宝玉が、漆黒の塔の根元で不気味に発光している。

（なんだ、この禍々しい光は……？）

ロウはこれに似た光をひとつだけ知っていた。落とし子が持つ竜の痣の輝きだ。あちらは神々しいほどの金色で、こちらは毒々しさすら放つ真紅。本来ならば似ても似つかぬ色のはずなのに、偽装屋の目にはなぜかこの二つが同じものに見えた。

息吹の光——ふいにロウの脳裏にそんな言葉が浮かんでくる。落とし子が息吹によって風雲雷雨を喚び出す際、竜の形になって具現化する光。生命の輝き。

（そうだ、この輝きは息吹が生み出す光だ。でも、もしそうなら……）

もしこの輝きが息吹によるものだとしたら——いったいこの大きさは何だ？

（これだけの息吹、落し子が一人や二人出し合っただくらいじゃきかないぞ。体中から根こそぎ搾り取っても、十人以上の落し子が必要のはずだ）

ロウは息絶えた少年の言葉を思い出す。

『奪われた……やつらに……』

落し子の少年は死ぬ直前に、たしかにそう口にしたのだ。

（奪われた……そうか、そういうことだったのか！）

きっとあの少年は何らかの方法で、息吹をこの結晶に強奪されたのだ。どうやったのか方法はわからないものの、もしそうだとすればこれだけの大量の息吹にも合点がいく。

だがいったい、なんのために？

（蛟竜騎士団は落し子を殺すことが目的の集団だ。それなのに、落し子からわざわざ息吹を奪って溜め込んでいるのはなぜだ？）

わからない。が、大勢の落し子が犠牲になっているのだけはたしかだ。

（いまはそれどころじゃないな。早いとこ、シエルと合流してギルドに戻らないと！）

ロウの足が出口へと向かった、そのとき。

階段の上で、カチリという音が鳴った。

（まずい、誰かが下りてくる！）

慌てて周囲に目を走らせる。しかし、殺風景な広間には身を隠せるような物はない。

迷いようがない劇場の設計に、ここは隠し扉の奥ときている。道が解らないふりをしたところで、すぐにばれてしまうだろう。自分が捕まれば、連れだっているシエルの身も危うい。そればかりか、チケットを手配したギルドにまで迷惑がかかってしまう。

いや、そもそも自分が捕まった時点で最悪の展開ではないか。

ロウが立ち尽くしている間にも、足音は近づいてくる。蛟竜騎士団の騎士たちだ。騎士はどうやら二人のようで、近づくにつれて話し声まで聞こえてきた。

「それにしても参ったよな。せつかく捕まえた落し子だったのに、逃げ出した上に死んじまうんだから。下水道から脱出なんて、よくやるぜ」

「ほんとだよ。ったく、奴らを一人捕まえるのにどれだけ苦勞させられることか……」

「とはいっても、あいつらから息吹を奪い取れるのはアリシア様だけだからな」

「まったく。殺しちや息吹が消えちまうし……面倒だよなあ」

蛟竜騎士団の騎士たちの重なった濁声が、いつそうロウの気を焦らせる。呑気に雑談に興じる彼らは、まさか地下空間に偽装屋が忍び込んでいるなど夢にも思っていないのだろう。その顔が驚愕の色に染まるのに、さほどの時間はかからないだろうが。

（一か八か、騎士二人を相手に立ち回ってみようか。でも、蛟竜騎士団の騎士は全員が常時武装してるはずだし、数でも力でも劣ってるよな……）

対するロウは丸腰なのだ。しかも、闘いには不利極まりない礼服用と着てきている。

だが、そうやって逡巡する間にも、話し声はどんどん近づいてくる。

（考えてる時間なんてないぞ。仕方ない、こうなったら……）

騒ぎを起こすことにはなるものの、黙って捕まるよりは幾分かましだろう。

意を決して、ロウは左手の手袋に指を掛けた。自ら打って出て、相手が油断している隙に先手を取る。不意を突いたところで劣勢なことに変わりはないが、少しは有利に闘いを始めることができるはず。

大きく踏み込み、跳躍するが如く駆け出す。

——と、どこからか悲鳴が聞こえてきたのはそのときだった。

「な、なんだ!？」

つい口を突いて出てきてしまった吃驚が、もしロウ一人だけのも

のであったなら、決死の覚悟を決めた偽装屋は文字通り命を落としていただろう。だが、驚いたのはロウばかりではない。幸いなことに、上段では緑青色の制服に身を包んだ二人の騎士も下りてきたばかりの階段の上を振り返っていた。

驚くのも無理はない、ここは地下なのだ。隠し扉は閉まっているし、そもそも扉自体はるか上方にある。いくら人間が大きな悲鳴を出したところで、それがここまで届くはずもない。

そう、人間の悲鳴ならば――

（この悲鳴……まさか、シエル！？）

先ほどまで我知らずロウを脅かしていた二人の騎士たちが、背後からでもわかるほど慌てた様子で階段を駆け上がる。機敏な動きはさすが蛟竜騎士団の騎士といったところだろう。一瞬にして隠し扉まで戻り、小さな戸を押し開けて外へと出て行った。階下に偽装屋が潜んでいたことなど、まるで気づいていない。

すんでのところで命拾いしたロウだったが、胸をなで下ろす手など持ち合わせてはいなかった。彼の頭はすでに観客席に残してきた精霊の少女のことではいっばいだった。

（なんだ！？ いったい何があったんだ！！）

尋常ならざる事態が起きたのは誰の目にも明らかだ。そして、その渦中にシエルがいるということも。

やはりシエルを連れてきたのは間違だったか。自責の念が若い偽装屋へと押し寄せる。だが、いまは後悔に打ちひしがれているときではない。一刻も早く彼女のもとへと戻らなければ。

騎士と同様、薄暗い階段を駆け上がり、ロウは固く閉ざされた隠し扉に耳を押しつける。蛟竜騎士団の二人が遠くに去るのを音で確認して、絵画の裏から外へと出た。

頭の中に描いた劇場内部の地図から、シエルがいるはずの観覧席へと向かう最短ルートを一瞬ではじき出す。もはや、なり振り構っている場合ではない。ロウは柔らかな絨毯の上を全力で疾走した。前方の喧噪はだんだんと近づいてくる。女の悲鳴と、それを抑え

つける男たちの怒号が混ざり合っている。

「嘘だ！ ミハエルが死んだなんて、嘘だ！！」

シエルの悲痛な叫びが、ロウの鼓膜をふるわせた。

（何やってるんだよ！ 早く逃げろよ……逃げてくれ！！）

ミミックはいざとなれば何にでも擬態することができる。騎士たちから逃げ出すことなど簡単はずだ。にもかかわらず、我を忘れて泣き叫ぶほどの悲劇が、精霊の少女に降りかかったとでもいうのか。

曲がり角を曲がろうとした瞬間、ロウは一陣の風の如く駆け抜ける赤い影とぶつかりそうになった。

（くっ……！）

偽装屋としての本能か、周囲の注意を引くことを恐れた足が咄嗟に地面を突っ張って、赤い突風をやり過ごす。だが、そんなことをしなくてもこちらに気づかないほど、相手も慌てているようだった。血相を変えてロウの前を横切っていったのは、赤色の風と見まがう長髪長身の女騎士——蛟竜騎士団ベルガノ支部支部長、アリシア・ファレルだった。

「おい、貴様！」

アリシアは燃えさかる炎のような赤毛を乱して、別の騎士に抑えられているシエルに詰め寄る。

しかし相変わらず、シエルは泣き叫ぶばかりだ。

「ミハエルが死んだなんて……いや、いやああっ！！」

美しい顔を涙でぐちゃぐちゃにして、シエルは建物全体に響き渡るような大声量で泣き叫び続けた。数人の騎士が必死になって抑えているが、彼らの鼓膜は無事では済まないだろう。ゆえに、そんなシエルを目の前にして、アリシアがぼそりとつぶやいた言葉を、いったい誰が聞きとがめることができただろうか。

「なぜ……なぜ貴様がその名を知っているのだ……『初代』竜王の名を」

やがて、ここで問い糾しても意味がないと思ったのか、平静さを

取り戻したアリシアは騎士たちに指示を出す。

「地下牢にぶち込んでおけ。後で私が調べに向かう。他の者は、観客たちを落ち着かせてから、劇の続きを見させるように」

迷いのない決断に、騎士の一人が問う。

「あの……劇はまだ続けられるんですか？」

「無論だ。これしきで中止とあつては、今後が思いやられる」

そう言い残して、アリシアはきびすを返した。おそらく、彼女同様、来賓として招かれているであろう議員たちの相手をしに行くに違いない。突然の事態に劇場中が混乱している。それを収めるのは彼女の仕事だ。

すれ違ふアリシアの背中を、どこかに連れて行かれるシエルの姿を、ロウはただ呆然と見つめるしかなかった。

（いま僕が出ていっても、シエルは助けられない……）

勇気と無謀は違ふ——それは偽装屋としての旅で体に刻み込まれたこの世の摂理だった。

（一旦、ギルドに戻って対策を立てるべきだ。地下の塔のこともある。クリスに相談して、それから——）

だが、頭ではわかっていても、ロウは自分を責めずにはいらなかった。

（僕のせいだ。巻き込んでしまった……『また』関係のない者を巻き込んでしまった。僕は……僕はまた……）

若い偽装屋の脳裏に、幼い頃の記憶が蘇る。シエルの笑顔が、記憶の中の少女と重なる。記憶の中で、亜麻色の髪の少女が微笑みかけてくる。

——そして、いたいけな笑顔が一瞬で朱に染まった。

（もう誰も巻き込まないって誓った……なのに、なんで！）

慌ただしく騎士たちが走り回る廊下の真ん中で、ロウはただ呆然と立ち尽くす。滅多に外さない白い手袋の下で、黄金の輝きが静かに瞬いていた。

第十三幕

肩を落として宿屋に戻ったロウを待っていたのは、目も当てられない惨状だった。

（そんな……ギルドが……）

泣きつ面に蜂、弱り目に祟り目とはまさにこういうことをいうのだろう。地下にシェイプシフター・ギルドを構えた宿屋は、焼け落ちて消し炭と化していたのだ。二階建ての宿屋は、焼け焦げた骨格だけを残して、元の姿はもはや見る影もない。

シエルのことと打ちひしがれていたロウの頭は、完全に真っ白になった。佇立したまま固まっているロウに、背後から声がかかる者があった。

「ロウ……？ よかった、無事だったのね！」

声のする方に振り向くと、黒髪の妖艶な人物が駆け寄ってくるどころだった。

「心配したんだから！ もう、帰ってくるのが遅いわよ！」

声の主は服のあちこちを焦がしたクリスだった。その後ろでは、一階にあった酒場の亭主が頭に血の滲んだ包帯を巻いて立っている。彼に支えられているのは、いかにも軟弱そうな青年だ。おそらく、ヴァーミリオン劇場のチケットと引き替えにクリスと二人きりの夜を楽しんでいたはずの富豪とやらだろう。

「クリス……無事、だった、のか？」

「ええ、なんとかね。そう簡単にやられやしないわよ」

汗にまみれた黒髪をかき上げ、ギルドの主はにこやかに微笑んだ。「いきなり蛟竜騎士団の騎士たちがやってきて、油を撒いた上から火をつけたの。もう問答無用だったわ。隠しとかないといけない名簿とかまで燃えてくれて、そういう意味では助かったんだけど」

そう言って、いたずらっぽく片目をつむってみせる。そんな軽口が叩けるくらいならば、体の方は大丈夫だろう。だが、蛟竜騎士団

に顔が割れた以上、この街でシェイプシフター・ギルドを続けるのは困難を極めるだろう。

責任感の強いクリスなら、少々の火傷よりも精神的な痛手の方が深刻だ——いやこの場合、それ以上に問題となってくるのは。

「……ねえ、やつらがここを嗅ぎつけたのって、誰かが情報を漏らしたんだと思うの」

不安を払いのけるように明るさを保っていた顔から笑みが消え、クリスは声を潜める。ロウは苦虫を噛み潰したように顔をしかめ、次の言葉を待つ。

次の言葉は、言われずともわかつているのだが。

「あの子……シエルちゃん、だっけ？ いまどこにいるの？」

漆黒の瞳は何を糾弾しているわけでもない。問いかけ純粹な疑問であり、他意は含んでいないかに思える。だがそれは、目の前にいるのがロウだからだ。もしここに件のミミックがいたならば、クリスの整った顔はたちまち憎悪に歪むことだろう。

ロウは言いづらそうに声を絞り出す。

「シエルは蛟竜騎士団に捕まった。劇場で騒ぎがあつて、アリシアとかいう騎士に連れて行かれたんだ」

事実だけを淡々と述べる。反応は案の定、冷ややかなものだった。「連れて行かれた？ ……ついて行つた、の間違いじゃなくて？」

クリスの双眸が疑惑の色に染まる。

「あなたが連れてきた人を疑うのは本意じゃないけど……でも、わたしがあの場所にギルドを構えてから、一度たりとも外部の人の侵入を許したことはないのよ。それをあの子は、いとも簡単に忍び込んできたわ」

ロウが述べたことと同様、こちらもまた淡々と語られる事実だ。

「初めてギルドに部外者が忍び込んできて、その後すぐに蛟竜騎士団が動いたのよ。いままでは何もなかったのに……ちよつと出来過ぎてると思わない？」

クリスの澄んだ目が細められる。ギルドの主は、シエルが蛟竜騎

士団と内通していると疑っているのだ。

ロウにしてみても、シエルが自分の過去について語った話が本当かどうか、その確証はない。だから、彼女にかけられた疑いを晴らす証拠はまったくもってない。

そして、とどめの一言が、クリスの口から発せられた。

「それに、あの子は人間じゃない……信用なんてできないわ」

否定しようがない事実だ。数百年前にすでに絶滅したとされる精霊。生き残っていたことを信じてもらえただけでも奇跡に等しいのに、この上さらにその精霊が味方であることを信じさせることなど、もはや神の御業である。

だが、ロウはシエルを疑ってなどいない。少なくとも、彼女がどうやって連れ去られたかを目に見しているのだ。あの悲鳴と涙が偽物だとはとても思えない。

ギルドの主に向けて、ロウは唸るように尋ねた。

「……シエルが、僕たちを売ったと？」

クリスはうなずきも、首を横に振りもしなかった。ただ、ひそめられた眉が、その答えを如実に物語っていた。

こうなつてはもうシエルの信用を取り戻すことは不可能だろう。このままではギルドの協力は得られない。だが、それならば手法を変えるまでだ。

「この街の蛟竜騎士団が『とんでもないもの』を造ってる……昨日の晩、きみはたしかそんなことを言ってたよね？」

急に話題を切り替えられて、クリスは当惑の色を浮かべつつもいぶかしがった。

「ええ……でも、それがどうかしたの？」

「ヴァーミリオン劇場の地下に、息吹を溜め込んだ巨大な装置があるのを見つけたんだ。『とんでもないもの』っていうのはたぶん、その装置のことなんだと思う」

ロウは慎重に言葉を選んで話を進めていく。ここで失敗してギルドの協力が取り付けられなければ、シエルの救出は不可能になつて

しまうからだ。

「劇場の中央に立ってる塔の下に巨大な結晶があつて、異様な色をした息吹が溜め込まれてたんだ。蛟竜騎士団の奴らがそれを使って何をするつもりなのかは知らないけど、この街は何かよくないことが起こってる最中なんだよ」

「息吹を溜め込んだ結晶……たしかに、劇場の地下には不似合いな代物ね」

「あの装置にはきつと大勢の落し子から奪った息吹が使われているんだ。僕は偽装屋だ、落し子の旅を脅かすものは取り除かないといけない……クリス、協力してくれるかい？」

しかし、少しの間黙考してから返されたクリスの返事は、冷やかかそのものだった。

「……誤魔化そうとしても駄目よ、ロウ。それは単なる口実で、あなた、あの子が助けたいだけでしょ？」

井戸の底よりなお暗く、吸い込まれそうな瞳がロウを見つめる。

「ヴァーミリオン劇場の建設には、ベルガノ自治議会が金銭面で援助していることは知ってるでしょ？ そんな怪しい装置があるなら議員に掛け合つて圧力をかけてもらった方がずっとリスクが少なくて済むわ。議会の方でも蛟竜騎士団をよく思つてない人はいるみたいだし、必ず劇場の地下に視察が入ることになるわ」

「だけど、それって何日も後のことだろ？ 何週間、何ヶ月先になるかもしれない。その間に、また落し子が息吹きを奪われでもしたら——」

「あなたが心配しているのは、あの子のことだけでしょ？ 蛟竜騎士団の荒っぽい噂のせいで、この街に落し子や偽装屋が来ることなんて滅多にないじゃない。彼らが蛟竜騎士団に捕まってしまう可能性は低いわ。でも、シエルちゃんは今捕まってるんですものね。だから今すぐにでも助け出したい——そうでしょ？」

冷静なクリスの指摘は的を射ていた。それはまさに、ロウが危惧していたことそのものだったのだ。

時間をかけてベルガノ議会で働きかければ、確實かつ安全に蛟竜騎士団の秘密を暴くことができる。いまここで動いたのでは、損こそあるものの一切の得はない。

「シエルを助けるのに、協力はしてもらえない、のか……？」

「ええ……危険が大きすぎるわ。ギルドを預かる身として、協力はできない。部外者のために綱渡りはできないわ」

「そう、か……」

折しも蛟竜騎士団の暴挙によってギルドが全焼した直後である。

その主としては、当然の選択といえた。保守的だと愚弄することなどではしない。

（クリスが言ってることは間違ってる。でも……）

それでは、シエルを助けることはできない。

（僕が巻き込んだんだ……僕が……）

ロウと出会うことさえなければ、シエルは今頃も谷底の遺跡で眠ったままだったろう。蛟竜騎士団に捕まることもなく、ミハエルとかいう男の帰りを待ち続けていられたはずだ。無関係だったはずの彼女を、ロウが巻き込んでしまった。

罪悪感——否、それ以上の呵責がロウの心に棲み着いている。

（……でも、いまならまだ取り戻せる。昔とは違うんだ！）

若き偽装屋は顔を上げると、意を決した。

「僕の鞆は……宿と一緒に燃えてしまったの？」

「いえ、ちょっと焦げちゃったけど、なんとか無事……って、まさかあなた一人で乗り込むつもり！？」

「きみの言うとおり、シエルは部外者だよ……無関係の人を巻き込んで、自分ひとり生き残るのは、もう嫌なんだ」

しばしの間、クリスは逡巡していたが——やがて、やれやれと肩をすくめた。酒場の亭主の後ろに堆く詰まれた瓦礫の山の中から大きな鞆をとつてくると、押しつけるようにロウへと渡した。

「どうしても行くっていうんなら、わたしは止めない。でも、約束してちょうだい、必ず生き残るって。たとえ蛟竜騎士団に捕まった

としても、生きてたらわたしが議会に働きかけて助け出してあげられる。けど、死んじゃったら――」

「……わかってる。どんな手を使ってでも生き残るよ」

返答までにわずかな時間があつたことに、クリスは気づかないふりをしてくれた。

愛用の古くさい旅行鞆を掲げて、ロウはきびすを返す。おそらくもう二度と会うことはないであろう人々に背を向けて、精霊の少女の待つ劇場へと急ぎ走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1593x/>

ミミック・ガール

2011年12月2日20時52分発行